

民族舞踊文化



No. 9

1996年10月16日

THE MATUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE

財団法人 黛民族舞踊文化財団

〒107 東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F TEL03-3583-5633(代)
FAX03-3583-5639



追悼 黛 節子 先生

(財)黛民族舞踊文化財団

理事長 犬 丸 直

昨年10月16日に、黛節子先生が御他界になり、同月21日に悲しい野辺送りをいとなみましてから、早くも一年が経とうとしております。黛先生により設立せられ、その強いリーダーシップの下に活動を続けてきた黛民族舞踊文化財団は、先生亡きあと、途方にくれる思いをふりきって、先生の御遺志を体し、財団の目的とする、日本の民族舞踊の興隆発展および世界の民族芸能との交流促進の実現を目指そうと決意し、数々の事業展開を準備いたしております。

先生は財団理事長として、火の玉のような情熱と類まれな行動力とをもって、機関車のようにこの財団を引っ張ってこられました。私はおすすみにより、はからずも後任の理事長の役をお引きうけすることになりましたが、もとより先生に代わり得るような素養も能力も持ち合わせません。大野常務理事をはじめとする他の役員のかたがた、先生から直接指導を受けられた舞踊団のひとびとなどの絶大な御支援、一致協力の努力に頼るほかありません。関係者一同の合力にすぎり、黛先生により点じられ掲げられた民族舞踊の灯の火を消すことのないよう、より大きく明るく輝きわたらすことのできるよう、及ばずながら努力いたしたいと存じます。

このときにあたり、「民族舞踊文化—黛節子追悼号」を発行するとともに、先生の祥月命日の10月16日には、先生を偲ぶ会を催し、財団のこれからの活躍に、はずみをつけるよすがにも致したいと存じます。諸方面の各位の御賛同と御協力を伏してお願い申し上げます。願わくば在天の先生の霊も、私どもの行動を見守り、冥々の裡に知恵をさずけ、力を添えて下さらんことを。

故 黛 節子のプロフィール

本名： 武 田 き み
生年月日： 大正 7 年 2 月 11 日
出身地： 東京都
出身校： 女子学院 昭和 1 0 年 3 月卒業
所属： (財) 黛民族舞踊文化財団理事長
黛アート・サロン 主宰
黛節子舞踊団 団長
(社) 日本舞踊協会員
日本民俗芸能協会理事
国際民族芸術組織〔I O V (ユネスコ・B T カテゴリー)〕 理事、評議員、執行委員、文化助成委員長

芸歴： 昭和21年、初代花柳寿美に入門。後、藤間流に移り藤間流家元藤間勘斎〔先々代松本幸四郎〕より名取りを許され藤間節子となる。
昭和24年帝国劇場に於ける第1回発表会を機に、高村光太郎、志賀直哉、小宮豊隆、小泉信三等諸先生方の御支援のもと、創作舞踊と民俗芸能の研究発表に専念する。
その間、能を橋岡久太郎、地唄舞を山村れん、舞楽（右舞）を豊昇三、御冠船踊りを親泊興照の諸師に学び、又日本各地に伝わる伝承芸能（東北の剣舞、鹿踊り、山伏神楽、霜月神楽、新潟の綾子舞い、沖縄久高島のイザイホー、宮古島のウヤガン、竹富島の種とり祭）等の現地取材と、神事芸能の中の巫女舞の研究等から新しい日本民族芸術の確立を目指す。
昭和31年黛姓に改名し黛節子舞踊団を設立、日本の民族舞踊団として活動の基盤を確立し、以後、国内外に於いて数多くの民族舞踊作品を発表上演を続ける。
昭和56年より昭和62年迄、玉川大学文学部芸術学科の講師として生徒の指導に当たる。
昭和60年度から中国舞踏家協会雲南分会との交流を開始。
昭和61年、日本民族舞踊の国際普及と、世界の民族芸術交流促進を図る為、(財) 黛民族舞踊文化財団を設立、認可を得て理事長に就任。
平成 2 年、ウィーンに本部を置く国際民族芸術組織〔I・O・V〕の招請により、I・O・V 総会に日本代表として出席。I・O・V からの要請で理事、執行委員、及び文化助成委員長等の役員に就任する。

賞： 昭和27年度芸術祭文部大臣奨励賞
平成3年11月勲四等瑞宝賞叙勲

作品、事業歴年表：

- 昭和24年（1949）『藤間節子リサイタル』高村光太郎作「智恵子抄」他、上演。〔帝国劇場〕
- 昭和27年（1952）『藤間節子リサイタル』小川未明作「赤いローソクと人魚」「ヒエツキ唄」他
上演。（昭和27年度芸術祭文部大臣奨励賞受賞）〔帝国劇場〕
- 昭和29年（1954）『日本民族舞踊集』上演。〔東横ホール〕
- 昭和31年（1956）『日本民族舞踊集〈第2集〉』上演。〔東横ホール〕
黛姓となり、黛節子舞踊団結成。
皇后陛下御臨席、学習院常磐会にて舞踊披露。〔椿山荘〕
- 昭和33年（1958）宮沢賢治作「原体剣舞連」、志賀直哉作「荒絹」上演。〔読売ホール〕
- 昭和34年（1959）「田園詩曲」、「南風の乱舞」他、上演。〔大阪フェスティバル・ホール〕
- 昭和35年（1960）「土塊」、「万華鏡」他上演〔東京宝塚劇場、大阪フェスティバル・ホール〕
- 昭和38年（1963）「駒踊り」、「北から南から」、「小原木」他、上演。〔東京上野文化会館〕
- 昭和42年（1967）「日本の踊り」他、上演。〔国立劇場小劇場〕
黛ビル竣工、黛アート・サロン開場。
- 昭和43年（1968）第1回『黛アート・サロンの夕』開催。〔黛アート・サロン〕
- 昭和48年（1973）パリ三越オープニング記念公演出演。〔パリ〕
- 昭和50年（1975）ローマ三越オープニング記念公演出演。〔ローマ〕
「日本の民踊」、「桜樹散華」上演。〔日生劇場〕
皇太子殿下、同妃殿下御臨席、修養団70周年記念式典出演。
- 昭和51年（1976）「阿国幻想」上演。〔日生劇場〕
- 昭和53年（1978）サウジ・アラビアに於ける第1回ジャパン・デーに日本代表として出演。
〔サウジ・アラビア王宮〕
- 昭和57年（1982）「1982年ノックスビル国際エネルギー博覧会」（米国）のジャパン・ウィークに日本
民族舞踊代表として出演。〔ノックスビルEXPO会場〕
- 昭和59年（1984）「延年」他、上演。〔草月ホール〕
- 昭和60年〔1985〕中国舞踏家協会雲南分会の招請により、中国雲南省を訪問。日中舞踊交流の会に出演。
及び中国少数民族舞踊の研究取材。
- 昭和61年（1986）財団法人黛民族舞踊文化財団の設立が認可され、理事長に就任。
中国舞踏家協会雲南分会、劉金吾常務副主席他3名を招請。財団主催により約一週間、
日中舞踊交流の会を催す。
- 昭和62年（1987）中国舞踏家協会雲南分会の招請により、再度中国少数民族芸能取材の為舞踊団を引率し
て雲南省を訪問。ジノー族等の少数民族舞踊の取材及び日中舞踊交流公演。
- 昭和63年（1988）
6月 『雲南省少数民族友好舞踊の夕』〔草月ホール〕
中国思茅地区民族歌舞団団長岩宰氏を招請。
『セミナー』一少数民族舞踊の現代化－岩宰（タイ族）〔黛アート・サロン〕
- 8月 中国舞踏家協会雲南分会第2回訪日団来日。北上市、松本市等に於いて、民族舞踊
の取材と舞踊交流の会を持つ。
「レモン忌」－智恵子没後50年記念－〔黛アート・サロン〕

- 平成元年（１９８９）韓国文化広報部の招請で訪韓。国立慶州博物館李蘭暎館長、慶州大学校金白峰教授、韓国舞踊協会姜善泳理事長、中央国立劇場、韓国国際文化協会等を訪問、民族芸術に関する両国の意見交換を行った。
- 平成２年（１９９０）中国舞踏家協会雲南分会第３回訪日団招請。東京に於ける交流舞踊公演及び富山県の“越中おわら”取材交歓会。
国際民族芸術組織〔Ｉ・Ｏ・Ｖ〕の招請を受け、ウィーンに於いて開催された総会に出席。
総会でＩ・Ｏ・Ｖ理事、評議員、文化助成委員長就任の要請を受け受諾。
- 平成３年（１９９１）中国舞踏家協会雲南分会の招請で、日中舞踊交流の為舞踊団を引率し訪中。
勲四等瑞宝章叙勲
- 平成４年（１９９２）
６月 『三味線ロード’Sおどり』—民族芸術まんだら— [黛アート・サロン]
８月 雲南省舞踏家協会第４回訪日団来日。
『日中舞踊交流会』“ヒー・ヤイ踊り”取材交歓会 [静岡県中川根町]
- 平成５年（１９９３）
５月 『日中舞踊交流公演』—ライスロードの芸術家と共に— [草月ホール]
[中国側の事情により舞踊家の来日が不可能となったため公演中止]
- 平成６年（１９９４）
３月 雲南省舞踏家協会の招請で、日中舞踊交流の為舞踊団を引率し雲南省を訪問、紅河、文山地区でミャオ族やイ族と舞踊交流。
６月 『黛アートサロン・トークの夕』 [黛アート・サロン]
韓国の舞踊 そのⅡ 丁明淑
８月 雲南省舞踏家協会第５回訪日団来日。
松本市、桐生市等に於いて民族舞踊の取材と舞踊交流の会を持つ。
１０月 『黛アートサロン・トークの夕』
観世流能楽師 八世 橋岡久馬氏 [黛アート・サロン]
１１月 『黛アートサロン・トークの夕』 [黛アート・サロン]
伝統とモダンの出会い 柳宗理氏
- 平成７年（１９９５）
１月 雲南省舞踏家協会常務副主席劉金吾氏を招請。
東京、埼玉、岩手県毛越寺等で中国少数民族舞踊についての講演会を開く。
- 平成７年（１９９５）１０月１６日 麹町半蔵門病院にて肺癌の為、永眠、享年７７才



わたくしの好きなキモノ

1955年4月26日号 読売グラフより

中日民族舞踊交流のかけ橋……黛 節子女史を偲ぶ

中華人民共和国特命全権大使 徐 敦 信
夫人 王 月 琴

中日民族舞踊交流の橋梁 ——怀念黛节子女士

值此黛节子女士逝世一周年之际，谨致深切的缅怀和哀悼。

黛节子女士一生致力于民族舞蹈事业。不懈努力

和锐意进取，使她在舞蹈艺术领域取得了巨大的成功。积极开展中日两国间的舞蹈艺术交流，是黛节子女士在她生命的最后十年里所从事的一项很有意义的工作。1985年黛节子女士应中国舞蹈家协会云南分会的邀请首次访华，此后又 3 次率团访问中国。黛节子女士还多次邀请中国云南的舞蹈家访问日本。在黛节子女士的开拓性努力下，中日两国民族舞蹈家通过表演和讲座等多种形式开展了丰富多样的交流，这些交流增进了两国舞蹈工作者之间的理解和友谊，推动了两国民族舞蹈事业的发展。

黛节子女士同我们永别了，但她在中日两国之间架起的民族舞蹈交流的桥梁，将永远闪烁着不朽的光芒。

艺术交流是心灵的交流，对发展国家关系也有重要意义。衷心希望中日两国的艺术家继续努力，通过形式多样的艺术交流活动，进一步加强中日两国人民之间的相互理解，为发展世代友好的中日友好事业做出更大的贡献。

中华人民共和国驻日本国
特 命 全 权 大 使
徐 敦 信
夫人 王 月 琴

1996年8月28日

黛節子女史の1周年にあたり、つつしんで、懐かしさとともに哀悼の意を表するものであります。

黛節子女史は、一生を民族舞踊のために捧げられました。たゆみない御努力と、進取の精神で舞踊芸術の面において大きな成功を収められました。

積極的に取り組まれた中日両国の舞踊芸術交流は、黛節子女史の最後の10年間にやりとげられた、たいへん有意義なお仕事のひとつであります。1985年黛節子先生は中国舞蹈家协会雲南分会の招きで初めて訪中され、以後三度代表団を率いて訪中されました。また、幾度も中国雲南の舞踊家を日本にお招きになりました。黛節子女史の開拓精神と御努力で、中日両国の民族舞踊家は公演やシンポジウムなどいろいろな形式の豊富多彩な交流で、両国の舞踊関係者間の理解と友好を増進させ、両国の民族舞踊の事業を発展させました。

黛節子女史は私たちと永遠に別れて行かれましたが、彼女が中日両国間にかけられた民族舞踊交流のかけはしは、永遠に不滅の光りに輝くことでしょう。

芸術交流は心の交流であり、国家関係の発展にとっても重要な意義をもつものであります。中日両国の芸術家が引き続き努力を重ね、多種多様な芸術交流を通じて、中日両国人民間の相互理解をさらに深め、世々代々の中日友好事業を発展させるためにより大きな貢献を果たされることを心から希望するものであります。

舞踊文化の交流のかけ橋として

駐日大韓民国大使館
韓国文化院 院長 朴 正 浩

黛節子さんのお名前は、舞踊を通じた韓日文化交流に尽力された日本を代表する民族舞踊家として存じ上げておりましたし、私がこの韓国文化院長として赴任して以来、お目にかかる機会もありました。私ども韓国文化院が主催する数々の展覧会や音楽の夕べなどイベントにもたびたび足を運んでくださり、花束で韓国の作家たちを激励してくださったことも1度や2度ではなく、暖かいお人柄の方だとの印象をつよくもちました。

韓国文化院監修の雑誌「韓国文化」95年8月号に「金白峰女史とわたし」という一文をお寄せくださいました。お亡くなりになる数か月前に書かれたその文章には、88年11月に韓国を訪れた黛さんが、韓国の民俗舞踊家金白峰さんと出会ったときのことが記されております。金白峰さんは88年ソウル・オリンピック開幕式の振付総括と最終フィナーレを飾った宮廷舞踊《扇の舞》構成・演出で知られる韓国ではトップクラスの舞踊家です。

民族舞踊家としてすでに名を成されたお二人が、舞踊文化の交流を目的としながらも、一個の人間として出会い、その後長くお付き合いを続けられたと書かれています。

お二人が相手の国の伝統舞踊の本質を学びとうという情熱と衝動から、気取らず力まず一つずつ実現していたことは、文化交流の一つの道標となるでしょう。

私どもは、黛さんの率直で暖かいお人柄から生まれた交流の芽をさらに大きく育てていかれることを期待しております。そのためにこれからもご協力をできればと思います。

黛民族舞踊文化財団の今後ますますのご繁栄を心よりお祈り致します。

おもいで

女優 朝丘 雪路

私が子供の頃、私の父、故伊東深水の自宅には、邦楽家、舞踊家、作家、役者さん達、いろんな分野の方々が、毎日の様にお見えになっていました。さながら文化人の方々のサロンのような場所であり、それぞれの名士の方々のお名前を思い出す時、その顔ぶれは実に豪華なものでした。父に原稿依頼に来られた方、お芝居の時代考証を相談に来られた方、踊りの衣裳デザインを相談に来られた方、それ以外に、父のお弟子さんや、画商の方々、玄関は足の踏み場もない程で、たいへん賑やかな家でした。黛先生も、その中のお一人ですが、先生が来られた時は賑やかな場所が一層華やかになり、父や黛先生の笑い声が今でも懐かしく鮮明に思い出されます。尤も、子供の私には最初の頃先生が何のお仕事をしておられるかも知りませんでした。ある日父に誘われ、先生の舞台を拝見し、民族舞踊を日本的にアレンジして創作された見事な踊りを見て、その美しさに、子供心にもあんな踊りをやってみたいなァと憧れたものです。私が宝塚に入ったりで、その後先生ともお逢いする機会もありましたが、私が女優として舞台に出演するようになってから、先生のお稽古場を先生のご好意でお借りする事が度々あり、先生とも又お逢い出来る機会が出来ました。先生は私が子供の頃の印象そのままのとてもやさしい方で、亡くなった父のお話を伺う事が出来るのも嬉しい事でした。先生の訃報を聞いたのは仕事先の九州のホテルでした。電話のベルの音に何かしら不安を感じながら受話器を耳にしたのを覚えています。十数年前、父の訃報を聞いたのも偶然にも同じ九州のホテルだったのです。こうして父のお友達がだんだん少なくなっていくのはとても悲しいことですが、父はきっと天国で先生との再会を大喜びしている事でしょう。 合掌

二人だけの話

十輪寺和尚 泉 浩洋

年月の経つのは早いものでございます。

黛節子先生が亡くなられてから早や一周忌を迎えることになりました。あらためてご冥福をお祈りします。

節子先生と初めてお出会いましたのは、確か平成四年頃でしょうか、十輪寺の業平忌三弦法要のことからと思います。当寺では毎年五月二十八日に三弦を弾いてお経を唱えるという大へん珍しい法要を催しています。先生はこの法要に非常に興味を持たれて、わざわざご来山くださいました。気さくで、明るいそして気品あるお方のように感じました。話しが弾むにつれて何となく親密感が増えてきて、以前に何回かお会いしたような錯覚さえ覚える程でした。邦楽のことにも非常に明るくて、常磐津なんかもやっておられたようにおっしゃっていました。このような先生との出合いを機会として、その後何回か当寺にお詣りに来られました。その折に、三弦法要の舞踊を創作してみたら面白いのではないかと、是非研究したいとおっしゃられたのです。私も非常に同感しました。「どんな作品が出来るでしょうかネ、先生」と申しましたら、「中国や日本の要素をミックスしてみましょ」と。三弦法曲とは申しますものの、実は私は「天台聲明」が専門ですので、この話を申しますと又々話しが弾んで、ついに聲明の舞踊化まで進んでしまったのです。

その後何回か先生とお出会える機会がありました。心密かにこの実現を期待しながら先生とのコミュニケーションが続いてきたのです。ところが、惜しくも先生は他界を余儀なくされてしまいました。誠に諸行無常です。然し今再び思い浮かべてみますと、先生は本当に夢の大きいお方と申しますか、理想に燃えたスケールの広大な芸術家でありました。幸いに、先生の立派な後継者がおられます。若しこのことが、何時か先生のご霊前で実現出来たとしたら、本当に素晴らしい供養になることでしょう。今度は心密かにその時の来るのをお待ち申しております。

稲田 とし子

節子さんが15才、私が18才の時避暑地伊香保で知りあいました。

当時宝塚では小夜福子、葦原邦子の全盛で小夜福子の人氣が葦原邦子より少し上でしたが私は葦原邦子のファンでした。

ところが節子さんも同じ考えという事がわかり若い娘二人意気投合、それからつかず離れず62年以上の年月を友人として付き合い、お互いの悩みや苦しみもなでたりさすったりし合って参りました。節子さんの感性には本当に鋭いものがあり、彼女の日常生活そのものが芸術であったと思います。3才年長の私が後に残されるなど考えてもいませんでした。節子さんの華やかな芸術人生は矢張彼女の一生を短くする事にもなったかと思ひます。莉香さんの真心と努力によって節子さんの芸術人生の足跡を皆さま方で残して下さい事は、節子さんと共に私にとっても何よりのよろこびと感謝致しております。 旧友 稲田とし子(81歳)

黛 節子先生を偲んで

舞踊芸術 井上 道代

バイタリテイっぱいの先生が、どうしたの 何故？ 一瞬訃報に接したとき、何かの間違いではと思いました。今は少ない生粋の江戸っ子 歯切れのよいお話など、いまだに耳に残っています。向島の有名な料亭さんの娘さん、お父さんは、あの有名な常磐津三蔵さん、他所から伺った時、成程と思いました。お若いときは藤間節子さんの名取名で、日本舞踊で、活躍されていました。昭和61年 財団法人、黛民族舞踊文化財団を設立され、モンゴル、ウイグル、雲南の少数民族との文化交流に情熱をそそがれ、一門の方々を連れて、日本の民族芸能を発表、又現地の芸能の採訪にも意をそそがれ、隔年に、現地の方々を招いて、一般にはなかなか拝見出来ない、貴重な、珍しい芸能の夕べを企画され、拝見させて頂きました。何か古代の日本文化とのつながりなど考えさせられ意義深い会でした。本当に知識のない私など、とても勉強になりその会の御招きを心待ちにしていました。

私事です心が残りが一つあります。それは、ある陽春の一日、井上さん、今ね私の家の玄関のところ、芝桜がいっぱいよ、遊びにいらっしゃいよ、花は盛りがあるの今週中にね……とお誘いを頂きました。真っ盛りの芝桜を目に浮かべ、ぜひと思ひながら、日々の仕事に追われ、とうとうお約束を果たせませんでした。先日莉香さんよりおききしたのですが、先生は桜がお好きで、季節になるとそれは見事だったそうです。毎年の正月七日、七草粥のおもてなし、自ら、白いかっぱうぎ姿で、お客様方に、美味しいお粥をふるまわれました。

こういうゆかしい行事は戦前の家庭では見られましたが、戦後はあまり見られません。お正月になるといつも七日には黛さんのところへと、気持ちはずんでいました。芸能を通じて、「アジアは一つ」を身をもって教えてくださいました素晴らしい先輩の一人でした。

後継の皆様、亡き先生の御意志をつがれどうぞがんばって下さいませ。

黛先生へ

舞台衣裳製作 井上 よしみ

先生と始めてお会いしたのは、12～3年前だったと思います。衣裳の田代洋子先生に御紹介され、水色ジョーゼットロングドレスをお作りした時でした。初めてお会いした先生は、とても恐そうで、私の方は下ばかり向いていた気がいたします。でもその後、中国の民族衣裳をお作りした時から先生とお話する機会をもて、荻窪のお家でのお話は映画の話とか、どんなものをお好きとか、とても楽しい時間でした。

今でも赤坂とか荻窪に先生がいらっしゃるような気がしてなりません。もっともっといろんな事を教えていただきたかった。もっと、もっと……。

でも先生とお会い出来、私の一生の中で忘れられない方になりました。ありがとうございます。

映画監督

日本映画学校理事長 今村 昌平

黛節子さんは伝統芸能の育ちなのに、果敢に変革を求めて新境地を拓いた人だと知って私は大変興味を抱いた。私は映画作家として、若い頃から柳田学に惹かれ、いつも日本の土俗、民俗に拘泥って仕事をしてきた。歴史学が対象にし得ない個々の庶民の生きざまを明らかにしてみたいという欲求からである。

黛さんが、お座敷芸の日本舞踊から飛躍して民族舞踊へと方向転換した根底には、私の考え方と共通したものがあつたと思う。

私が創設した映画学校では、毎年新生を福島県の農村に連れて行って、一人ずつ農家に放り込み、田植を体験させている。

黛さんは「農民の踊りはカクトを大地に着けて、下へ下へと沈む踊りだ」と言ったとか……。私はこの話を聞いて、黛さんを学校の演劇科の講師にお願いした。

中国、雲南の少数民族の舞踊団が来日したときなど、黛さんは、そのメンバーとうちの学生との交歓会を企画してくれたりもした。学生も当初は面白がっていたが、今どきの軟弱な若者たちは、黛講師の厳しさに従ってゆけず、段々欠席者が増え、遂には殆ど零になったと報告を受けた。

校長として、恥ずかしかった。

元来、芸能は厳しい道なのに、若者には、そのところが判らない。

ある時期、私が黛民族舞踊文化財団の理事を引き受けていたのは、実はお詫びの気持ちからであった。(今は激務の為、理事を下ろさせてもらっているが)

学生は黛さんを理解できなかつたが、私は黛さんを理解していますよ——と伝えたいからであった。

今も、その気持は変わらない。

黛 節子さんのこと

前全日本舞踊連合会 事務局長 入方 宏

黛さんが亡くなられてもう10か月もたったと聞いて、改めて月日のたつのは早いものだと思っております。昭和35、6年のことだと思いますが、当時私は産経新聞の文化部で演劇を担当していました。社の先輩で早くから舞踊を受け持っていた景安正夫という人から「黛さんはもともと日本舞踊の人だが、民族舞踊にも夢をもっていて人間的にも面白い人だ」と聞いたり、朝日新聞で芝居の評を書いていた秋山安三郎さんから黛さんの愛すべき人柄を耳にして、彼女の仕事に関心をもって舞踊会へ伺うようになりました。

手許に資料がないので何時のことか詳しく書けませんが、会場が日生劇場だった舞踊公演に景安さんと一緒に行ったことがあります。今ではその公演がどのような内容だったか記憶が薄れてしまいましたが、大がかりな公演で驚いたものです。

正月七日の新年会にも何回かお邪魔しましたが、そのとき黛さんの嬉しそうなホステスぶりも、今ではなつかしい思い出になってしまいました。

黛さんが財団をお作りになったのもだいぶ昔のことになりましたが、その設立についてはいろいろ厄介な問題があったと思います。それでもご苦勞の影など感じさせず、いつも明るくふるまっているのを見て感心していたものです。

時折、そんな黛さんにお会いしてゆっくり民族舞踊のお話を伺おう、と思いながら、日常の雑事に追われてついその機をなくしてしまいました。

いまは黛さんのご冥福をお祈りしながら、彼女の遺産である財団の発展を願うばかりです。

国際交流への夢と情熱

前FM放送会社 常務取締役 上田 彦二

黛先生に最初にお目にかかってから、もう十数年になる。当時勤務していたFM放送会社の長野勝三社長（財団理事・故人）から財団の評議員として協力してほしいとのご依頼があった。映像を持たない音声放送と舞踊とはあまりにも関わりが無く、強くご辞退申し上げた。

その後間もなく黛先生が会社にお見えになり、お会いして驚いた。私よりかなりご高齢だが、まるで少女のように、民族舞踊への愛情とそれにかけた夢を語り続けられるのである。こうしてまたひとり黛ファンが増え、及ばずながらのお手伝いが始まったという次第である。

しばらくして先生から「中国の方よりIOV（国際民族芸術組織）に参加してはと、おすそめを受けているが、どんな組織か調べてほしい」とのご依頼があった。

早速ウィーンのIOVから規約や活動報告を取り寄せると、かなり多くの国の団体が参加しているユネスコ傘下の国際民間組織とわかった。先生はその後、IOVの活動を視察されるためヨーロッパにお出かけになったり、IOVの事務局長を招いたりして、積極的に交流を繰り広げられた。

そのうちに、先方から日本で国際大会を開催してほしいとか、日本に各団体を束ねた支部を開設してほしい、資金援助ができないか、などの申し出を受けていることを知り、いささか心配になった。

どうやら先方はこちらの名称が「財団」なので、資金を提供する機関だと考えているらしい。また日本支部も名ばかりでは先行きお困りになることも起きかねない。よくお考えを、と申し上げたこともあった。

民族舞踊にかけた先生の熱意を知り、援助や協力を求めてくる向きは少なくなかったようだ。その度に何とかしてあげたいと、入退院を繰り返しておられる身で、懸命に努めておられたお姿を思い出す。

その黛先生も今はない。振り返ってみると多くのことを教えていただいたのに、何にもお役にたてなかった。ただただ申し訳なく思っている。

天国の舞踊家 黛 節子さん

(社)日本音楽著作権協会会長 作曲家 遠藤 実

私の妻が亡くなって、初七日の夜でした。黛さんは、息を切らしながら二階の仏間に入ってこられ、「先生、奥様が亡くなられたのに、どうして、お知らせしてくれなかったのですか？」と、あの大きな目を、涙いっぱいにするませて、私の顔を見た。「黛さん、すいません、こちらも急なことで、ゆきとどかなくて」と言いながら、喪服を着た黛さんの、両手を取ると、黛さんは、「奥様も節子さんだったのですから、節子とかせっちゃんと、これからは呼んで下さい。」と、熱い涙をほろほろと私の手にこぼした。妻の遺影に、ねんごろに合掌をされ、「またお逢いしましょうよ」と、言われたが、それが黛節子さんとの最後になろうとは思ってもよらなかった。

その二年後、黛さんがこの世の役目を、おえられて天国に旅立たれてしまった。優しさと、厳しさと、情熱を持ち、民族舞踊に生涯を打ち込まれた、大舞踊家黛さんは、今は浄土におられ、御仏や、寂しさを持つ魂のために、きっとあの笑顔で踊られていることでしょう。また、先立った私の妻とも、お逢いして下さっているでしょう……。

テレビのレギュラーメンバーとして、ご縁を持ちましたが、長い間のご厚情を、思い出しております。

合掌

日韓舞踊文化の交流に尽くした人 安らかに眠り給へ

日本国際政治学会会員

アジア（A S I A）問題研究会研究員 大国 未津子

わが友、黛節子さんが亡くなったのは、私がちょうど出席中だった日本国際政治学会の1995年秋季研究大会が、広島市の修道大学で開かれていたときのことであった。広島でその訃報を受けた私は仰天した。全く信じられない思いで、胸がつまった。

黛節子さんは1991年11月3日に叙勲受章者として勲四等瑞宝章を授与されたとき「私の活動はこれからなのよ。見ていて!!」

と、たいへんな情熱を示して、私に語りかけたものであった。

「喜寿くらいまでは、研究と修業に忙しいのよ。私が本当の民族舞踊に取り組むのは、喜寿の齢を迎えてからよ」ところが、黛節子さんは、その喜寿を境に他界してしまった。何ということだ!!

もう16年くらい昔の話になるが、私が最初に黛節子さんにお会いしたころ、彼女は創作舞踊に熱中していて、神功皇后を、ジャンヌ・ダルクのような演出で踊りたいと、目を輝かせていた。それで、当時の歴史を調べたいからと、韓国文化院の図書室に日参していた。そして記紀伝承と、韓国側の史書を比較しながら読み続け、「開化天皇第五世の孫息長宿禰王の女で名は息長足媛。仲哀天皇の皇后となり、応神天皇を筑紫で出産したことまではわかったわ」

——でも、どうしても“新羅を征した”という事実が出て来ない限り、踊れないわ、と言いつつしていた黛節子さんだったが、ある日、神功皇后を踊るという夢をピタリと閉ざしてしまった。

その後、稲作との繋りの中で培われてきた日本舞踊と韓国舞踊は、一見大きな違いの上に成り立っているけれども、民族舞踊としては共通点をたくさん持っていると言主張していた。

そして韓国の古典舞踊家であり、また慶熙大学の教授をもつとめるインテリ舞踊家金白峯女史（韓国芸術院会員）と交際を続け、1991年11月7日から、3日間、金白峯女史とその弟子たちによる「韓国古典舞踊の会」を、黛ビル4階の黛アートサロンで大々的に開催した。この会は①韓国の宮廷舞踊 ②韓国の農楽を実演したのち、金白峯女史が、身体表現、コスチューム、楽器、リズムなどの解説で、「韓国の舞楽と日本の雅楽の研究」「両国民族舞踊の類似と相違」について考究するという高度の舞踊研究会であった。このとき黛節子さんは司会を担当し、半分踊り、半分しゃべった。

また1994年6月には、韓国の舞踊家、丁明淑氏を招き、トーク&パフォーマンスを開催し、「日韓の舞踊文化交流は、これからよ」

と、きわめて熱っぽい口調で話していた。だが、その翌年、黛節子さんは、惜しいかな、まるでウソのように、この世を去って行った。

「黛節子さんよ!!」私は慟哭した。

黛節子さんよ、安らかに眠り給へ!!

節子先生！ お約束します

(財) 舞民族舞踊文化財団 常務理事 大野 晃

私は、今でも地下鉄半蔵門線にのるのが怖い。

節子先生が半蔵門病院に入院されてから亡くなられるまでの3カ月間、殆ど毎日のように通ったあの重苦しい日々が思い出されるからです。“大野ちゃん、入院するから保証人になって。……留守中のこと頼むわね”と言われ“ハイッ”とはいったものの、入院されてから間もなく主治医の小早川先生に呼ばれ、精密検査の結果肺癌であると知らされた時は、一瞬頭の中が真っ白になりました。

小早川先生がおっしゃるには“黛先生の性格を考えると、私の長年の経験からすれば告知すべきではないと思います”とのこと。感受性の強い節子先生に如何に気取られないようにふるまうか。申し訳なかったが他の誰にも口外してはいけないと心にきめ、それから苦しい闘いの日々が始まりました。

思へば私が19の詰め襟服の学生時代から46年間、節子先生の舞台の仕事に携わり、泣いたり笑ったり、時には口角泡を飛ばしての喧嘩も幾度か。それもこれもアッというまに終わってしまったという喪失感。“後を頼むわよ”とボールを抛ってこられ、忽然と消えてしまわれた先生。一年経った今、数ある思い出がより鮮明に浮かんできてこの胸を突き上げます。でも何時までも泣いている場合ではない、先生から抛られたボールを持って、少しでも前へ必死に走り抜かなければいけないのだと言い聞かせているのです。

ああもしたい、こうもしたいと民族舞踊に魅せられ、その情熱の灯を絶やすことなく燃やし続けてこられたのに、——先生の何分の一の力もない自分ですが、やがて先生のお側へ行った時“大野ちゃん！よくやってくれたわね、有り難う。”といってもらえるよう、先生が仕残されたことを少しでも実現すべく、精一杯努力するより他ないのだと言い聞かせているのです。

情熱のひと

武蔵大学教授 小笠原 恭子

節子先生を一言で言うなら、やはり、情熱^{ひと}の女、というのがふさわしいような気がする。

歌舞伎の祖、出雲のお国を踊りたい、ということでお声がかかり、おつき合いが始まった。スタジオにも何度か伺ったが、そのたびに、あらゆることに対する節子先生の情熱に圧倒され、片隅に座っているだけで、へとへとになった。

若い女性にも、大変なカリスマ性を発揮される方だった。そのころは、日本各地の民俗舞踊をアレンジした公演を持たれていたが、なんとか公演を見せていただいた私のゼミの卒業生が、さる流派の名取りだったのに、いまの流派を捨てて黛先生の内弟子になる、と言い出し、母親を仰天させたこともあった。

そのうちに節子先生の情熱は、この狭い島国からグローバルな世界へとあふれ出したようで、出雲のお国どころではなくなり、いつかお付き合いも遠のいたが、六代目の鏡獅子に一興行毎日通いつめ、ついに六代目から声をかけられたことなどを、熱を込めて語られたのが忘れられない。

お母上とも、お電話だけだったが、なんどかお話しさせていただいた。母一人娘一人という境涯が同じだといふので、親しみを感じて下さったようで、気丈に見えるが、何もかも一人でやっているから、疲れ切っていることがあるのが可哀そうで……とおっしゃったことがある。節子先生も、母上のことは折にふれ、話題にされた。その流れで、あるとき、いまは苦しいけれど、このビルが、いつか私のパトロンになってくれるはずだから、歯を食いしばって頑張っているのよ、と言われたこともあった。

そんな人間的なことを話されるのも、節子先生の魅力の一つだったのだろう。なんのお役にも立てずお別れしてしまったが、節子先生は、情熱をつくし、踊りつくして逝かれたのだから、お幸せな生涯だったと思っている。

黛 節子さんを偲んで

元国際交流基金専務理事 加藤 淳平

黛節子さんが亡くなられてもう一年の月日が経ったとは、信じられない思いがします。お付き合いのはじまりは、わたしが外務省で文化交流を担当するようになった昭和50年代後半からのことです。そして昔のことではありませんが、お年をとられるにしたがって童女に帰って行ったようなお人柄と、舞踊の国際交流にかけられた情熱に、敬意と親しみを感じておりました。

黛さんはお若いころ、日本の伝統舞踊の海外への紹介のため、舞踊家が結集して協力したとき、それに参加されたと聞いております。それから一生をととして、世界の中の日本の踊りを考え、踊りを通じての国際交流を実践されました。晩年には一生の決算のように、中国の雲南省の舞踊家たちとの交流に熱意を傾けられ、多少ながら、私もお手伝いすることができました。雲南省の奥地まで行かれた旅や、そこで見た民族舞踊のお話を聞かせていただいたことも、なつかしく思い出します。

文化交流に関連した公的な面でのお付き合いはさておき、毎年お正月の七草の会に、家の者ともども招んでいただき、七草のお粥をすすって、年が明けたように感じたものでした。文化を愛し、舞踊を愛する方ばかりの楽しい集いでしたし、黛さんの警咳にじかに接することができるのがうれしく、よほどのことがない限り、出席するよう努めておりました。そんなときの黛さんは笑顔を絶やさず、何にでも好奇心一杯で行動半径が広く、幼い子供のように感動する心をもった、明るい方でした。家の者とは特別に気が合うところがあつたらしく、時々電話で長話をしておられました。

「一隅を照らす者は国の宝なり」という、伝教大師のお言葉があります。まことこの世の深い闇の一隅にあって、一盞の灯りが夜を照らすように周囲を明るくする人は、国の宝のような貴重な人だと、大師はお考えになったのでしょうか。黛さんは一生かけて、その一所懸命さで周囲の人の心を明るくし、この世の闇の一隅を照らし続けられました。まさに国の宝のような方だったのではないかと——わたしにはそう思えてなりません。 合掌

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

黛 節子さんを偲びて

俳人協会理事 俳誌「河」主宰 角川 照子

草紅葉手繰りて遠き月日かな 照子

黛節子さんが、荻窪の私どもの家の前にお母上様の為にと、新築なされそれ以来隣人としてのお付き合いです。まだ角川源義在世中節子さんから頼まれ、定家を材題にした題本を書きましたが、ついぞそのままになり、節子さんの舞踊もみる事がありませんでした。

亡くなる2、3年前から、意欲的に民族舞踊にとりくまれ、その抱負をゆっくり聞かせていただく間もなく体調を壊され、まことに残念でございました。

草木を愛され、よくお庭の手入れをなさっていらっしゃいました。何本か苗を私どもにも分けて下さいまして、いまでは思い出となっております、そろそろ紅葉の頃となります。

一周忌を迎えるにあたり、節子さんの念願を財団により、益々の発展をお祈り致します。

ひたむきなひたすらの夢

(株)日本音楽著作権協会 理事長 加戸 守行

黛節子先生に初めてお会いしたのは、今から十数年前、私が文化庁次長時代のことでした。さる人の紹介で次長室に飛び込んで来られた先生は、初対面とは思えない人懐っこさと独特の甘えるようなお言葉で、それまでの御活動、民族舞踊に懸ける思い、御自身の現況と将来展望などを熱っぽくお話しになられ、最後に「だからどうしても財団法人を作りたいの。加戸先生、お願い、お願い、お願い」とおっしゃられました。

人間には、たまさか不思議な出会いがあります。黛先生との出会いが正にそうでした。ひたむきな夢を持ってひたすらに生きて来られた人のみが持つ人間的魅力、それにお年とは到底思えないお若い言動にすっかり圧倒されてしまいました。私は、情熱だけで財団設立事務能力は皆無のケースと思い、「文化庁が作って差し上げるわけにはいきませんから、財団設立事務経験のある文化庁OBに手伝ってもらうのが、手っ取り早いでしょうね」と提案し、先生の「是非そうしてちょうだい」とのお言葉で、作戦開始となりました。

ということで、当時別の団体に勤務していた文化庁OGの木田禮子さんに白羽の矢を立て、ボランティアでのお手伝いをお願いして、書類作成に始まり文化庁との折衝その他一切を手弁当で仕切ってもらい、財団設立の運びに至ったという次第です。

このたび、犬丸理事長の御要請により黛民族舞踊文化財団の理事をお引き受けすることにしたのも、故黛先生のあのひたむきな夢を消したくなかったからでもあります。

先生、あの世でもひたむきな夢を御覧になりながら、ひたすらにお眠り下さい。

ひと 凜乎の女―追悼 黛 節子先生

前財団法人修養団常務理事
前社団法人中央青少年団体連絡協議会理事・事務局長

亀岡 重則

黛節子先生が平成7年10月16日にお亡くなりになったことを知らないままに、私はしばらくの月日を過ごした。先生の一週忌を前にして筆をとる感慨は無量である。

先生は、「日本の民族舞踊を研究し、継承し、さらに発展・振興させていくにはしっかりした組織が必要だ」との思いから、私財をなげ打って財団設立に踏み切られたのであった。その志なかばでの少し早すぎるご逝去が悔やまれる。

幸いに先生の芸道のよき理解者であり、先生も最も信頼しておられた、犬丸先生が後を継がれ、先生のご遺志が活かされていくことになり、有難いことである。

昭和36年11月、日本青年館で開かれた修養団の大会で、ダイナミックな捻捌き、会場に響きわたる勇壮な八丈太鼓、その舞台に魅せられてからというもの、私はすっかり先生の虜になってしまったのである。

昭和41年8月、東京プリンスホテルで開かれた世界青年会議（96カ国、約300名の海外代表）での「日本の夕」の数々の踊り、昭和50年5月、明治神宮会館での修養団70年大会における「祝い舞」など、あでやかで生命力にあふれ、凜乎とした舞台姿は、その企画にあたり、先生にご無理をお願いした私にとって生涯忘れ得ない思い出である。

昭和63年の初秋、『向上』の取材で私は黛先生を赤坂のアートサロンに訪れ、いろいろとお話を伺わせていただいた。

「もともと民族芸能というのは、人に見せるためのものではないんです。自分たちが祈りかつ願い、それを神に捧げるということから始まったわけですね。日本人誕生の祈り、苦しみ、悲しみ、喜びがこめられているのです。……それを解説して舞台芸術にまで高める。それは、私たち専門家がやらなきゃいけないことなんです。」

「跡継ぎは思想的にだれか継いでくれる人がいればいいのであって、芸術的な跡継ぎなんていうのは無理ですよ。形が変わってまた出てくれば別ですけど。」

「朝から晩まで雑巾がけして、お師匠さんになかなか教えてもらえずに、お師匠さんの踊りを見て“なにくそ”という気持で盗んだ芸というのは違いますよ。“はいお稽古始めますよ。”といって手とり足とり教えてもらっているのでは仕様がなですよ。だから一口でいえば、芸は盗むもので、教えてもらうものじゃないんです。」

黛語録の一部である。その折、先生は好きな女性として平塚雷鳥、松井須磨子、与謝野晶子、それに「狂っても自分を押し通した」という高村智恵子をあげられ、「いま、そういう女はいない」といわれた。私は、黛先生はそのような女の一人ではないかと思った。その思いは今は確信となった。

黛節子先生が逝かれた今、常にそばにあって先生を助け、苦楽を共にされた黛莉香さんによって、『黛節子先生言行録』といったものがまとめられたらと願う心切なるものがある。

芦屋にて

神田 千代

東京駅の丸ノ内側で、お眼のご不自由なお母様の手を取り、寄り添って、水谷教授夫妻（当時神戸大学教授）をお待ちになって居られた。それが私にとって黛先生との出会いでした。修養団の菅野様のご紹介だったと聞いていました。その日は、私は後でお宿の方に伺うことを約して失礼してしまいました。

数か月後、水谷の奥様のメッセージを届けに赤坂のお宅を訪ねたのは夏の季節でした。お稽古はお休みらしく静かでした。

その頃先生は民族舞踊の第一人者と聞かされていました。私も踊りに興味があり、少々古典を稽古していたのを水谷の奥様が話されたのかも知れません。つい踊りの話になり、先生の踊りへの情熱はその純粹さ、知的感覚溢れるお話振り、大きな瞳は輝き、色白の美しい現代的な舞踊家だと強く印象に残りました。帰る際に「時々遊びに来てね。」その言葉が忘れられず、いろいろなお稽古をするのも勉強かと思う様になり、踊り好きな友人を誘って赤坂のお稽古場にお邪魔しました。友人も皆踊り大好きの人ばかり、今迄の、ゆったりのお稽古とは段違い、始めから厳しかった。遠慮会釈なく、悪ければ大きな声が飛ぶ、友人達はそれが刺激だったかも知れない、頑張った。黛先生は「親から頂いた身体全体を使って踊らないと、」とおっしゃった。スピードがあり、リズム感があり、表情豊かな表現力で観客に見せる踊りであり、一人だけの踊りとは違う、その戸惑いは誘った友人達も感じ取っていた。足手纏いになり乍らリサイタルにも参加させて頂いた。プロの踊り、心掛け、いろんな勉強をさせて頂きました。いろんな失敗も、苦しみも、又楽しさもたくさん、懐かしく心に残っています。先生の生き生きとした活気のある顔が偲ばれます。踊りには厳しかったけど、本当に踊りに生命をかけた民族舞踊にはなくてはならない黛先生だったとおもわれます。（内外共に）

阪神大震災の時、芦屋で半壊し、息子の家に避難していた時に、先生が電話を下さった。「千代子さん、怪我なくて良かった。元気を出しなさいよ」あの時、どんなに元気づけられたか、お見舞い迄頂き、その後も電話を頂き「その後、どうしているの？」と案じて下さった、電話を切るちょっと前に「私、ちょっと体調を崩して、家で静養しているの」とおっしゃった「すぐなおるから」と云って電話は切れた。気になってはいたがそんなに悪いとは思わなかった。

お話の出来る時にお見舞いに行かなかった事が心残りで仕方が御座いません。

踊り一筋に生命をかけた黛先生の偉業を何卒心ある人々の力で先生の希いが叶えられます様に陰ながらお祈り申し上げます。

達筆の資料

評論家 如月 青子

「……節子は自身による演出・振付・衣裳に特色を示し、とりわけ衣裳についての感性が優れています。(略)……節子が芸術祭賞を受けた『赤いローソクと人魚』(27年)にも、その力が窺えました。そして昭和25年のリサイタルから発表し始めた民謡作品や、民俗芸能のエキスを体して舞台芸術に創り上げる——つまり、民族舞踊創成への研究に、長い歩みを重ねていきます。原曲をそのまま使うのではなく、芸術としての舞踊音楽につくりあげていく上での、その結果として、三味線をほとんど用いていないことも、性格の一つとしてあげられます」

黛節子様、先週出た本に私はこう記していますが、間違いはなかったでしょうか？

このことを確かめさせていただきたくお電話したのですが、取次ぎの方が「短いことなら伝えられます」とおっしゃいました。私は、点滴か検査の最中でしょうと思ひこんでいました。でもこれは、お歿くなりになる前日のことでした。翌日のおしらせにどんなに驚きましたことか！

その頃私も体調をこわしており、ご葬儀には家人がうかがいました。

思い出せば、昨年の初夏でしたか、黛さんの戦後の歩みについての私の拙い文章と、ご自身の自己採点とを考え合わせていただきたいので、というお願いの電話をいたしました。久々のことでした。その折、対応された方の口調が少々気がかりでしたが、間もなくご本人に連絡がつかしました。「お風邪でも？」「いえいえ、そんなことではないんです」「え？……」「いいのいいの」「……？」

用件をお聞きになった黛さんは「嬉しいわ。そんなこと調べて下さる方ないわ」と、生き生きしたお話ぶりでした。

一ヶ月程経ちました頃か、罫紙十八枚にびっしりとご自身の作品を書いた資料がとどきました。ご自選の数種の作品をあげてとお願いしていた私は恐縮してご連絡すると(この時もしばらくしてからでしたが)、しっかりしたお声でお話しになっていました。その後、留守番電話に「写真は御必要ではありませんか？」と吹き込んでくださっていたのが最後になりました。

この世に残しておきたい気持ちがおありだったからかと、今しみじみ思い出します。

「黛節子作品集(別名天使の幾何学)」と達筆で記されたその資料を改めて拝読し、深い感慨に包まれております。

合掌

赤いローソクと人魚
藤間 節子



童女のように ——光太郎憬慕——

高村光太郎記念会 事務局長

文芸評論家 北川 太一

黛さんは高村さんから届いたたくさんの手紙を、それこそ宝物のように大切にしておられた。赤坂田町に住む、当時の藤間節子さんに宛てた短い最初のはがきは、こんな風に書かれている。

おてがみ拝見しました。本気で全力を尽すほど強いものではありません。それはおのずから人に通じます。殊に芸術ではこれ以外に道がありません。ただ巧者だけでやる仕事は結局上手となるに過ぎません。人を動かすのは本気です。

昭和19年6月20日の日付を持つその返信が、激しい戦争のさなかに、一途にこころを燃やすこの若い舞踊家をどんなに励ましたか、想像しただけでも胸が熱くなる。その時黛さんが送った手紙は焼けてしまっていて残らないけれど、高村さんはその文面から、かつて「彼女は実に単純真摯な性格で、心に何か天上的なものをいつでも湛え居り」「思いつめれば矢も盾もたまらぬ気性を持っていたし、愛と信頼の深さは殆ど嬰兒のそれのようであった。」と書いた夫人智恵子と似たものを感じとったに違いない。それから亡くなるまで10年余りの関わりの中で、高村さんはその最初の印象を変えることがなかった。

戦争が終り、黛さんが『智恵子抄』の舞踊化を願った時にも、「あなたなら智恵子を下等にしてしまう事はないと信じますから」と快諾し、智恵子の着物にたいする好みなどを事細かに書き送っている。

いまは芸術のあらゆるジャンルで取り上げられる『智恵子抄』だが、生前そのすべてを拒否し続けて来た高村さんが、唯一の例外として許したのは黛さんの舞踊だけだった。

昭和24年6月11日、帝国劇場での上演の前日、岩手の高村さんの小屋に届いた黛さんの手紙の一節、

節子の誇り得る只一つの事、それは先生の大きな大地の様な御庇護のある事。私には何もない、けれど、母の慈愛、そして芸術を育てあげ様として下さる先生の慈愛、裸でぶつかってゆく私のやむにやまれない情熱。それは何ものにも代え難い私の大きな財産、宝物、……

先生 ジャー一生懸命踊ります。夕暮れの見晴らしで、見てらして下さいネ。智恵子は千鳥と遊び、切紙細工の中で、美しく可愛らしくおどります。

高村さんが保存していた、往復書簡を組み立てられる程の折々の手紙の束。東京に帰ったあと、高村さんを襲った赤坂山王病院での愉快的な青汁攻撃の話。高村さんが亡くなった時の身も世もない黛さんの悲しみ。書き連ねてゆけばきりもない。

歓びのとき、悲しみのとき、ことあるごとに夜遅く鳴り響く電話のむこうの、いつまでも尽きない高村さん憬慕の繰り言が、今も耳にある。時には童女のようにあどけなく、時には「小鳥のように臆病で、大風のようにわがまま」(『智恵子抄』)だった黛さんは、今頃高村さんと、どんなお話をしているだろうと、ふと懷う。



智恵子抄 切紙細工 藤間 節子



昭和二十一年六月一日
山形市山王病院にて
高村光太郎先生と
藤間節子さんと
赤坂山王病院にて
山形新聞社撮影

三十年あまり昔の赤坂見附の歩道橋の上で、「はい、お土産」と黛節子先生は私の手にスペイン製の石鹼をのせてくださった。数日前にスペインの公演から帰国されたばかりだった。

頭上にはカンカン照りのお日様があり、その明るさの中で、石鹼の包み紙に描かれた舞姫の赤い舞扇が燃え立つようだった。「六代目がお気に入りの石鹼だったんですって。」先生が言葉を継がれ、私は歩道橋の階段を降りながら手の中の石鹼の絵をまじまじと眺めた。大きな扇を広げ、黒いチュールレースのかぶりものをして、黒いドレスの裾をひるがえしている、官能的でコケティッシュなスパニッシュダンサーの絵である。「マハ」と読める文字は彼女の名前なのだろうか。

六代目菊五郎の愛用品とは興味深いお話だったが、それ以上に心を占めていたのは、なんと舞姫・黛節子その人らしい贈り物かという思いだった。数ある石鹼の中からほかならぬ「マハ」をお土産に選ばれたことも、ボンと一つだけ、それも歩道橋を歩きながら手渡ししてくださるなさりようも、みんなみんな黛先生らしかった。

使うのがもったいなくて長い間タンスに納め、開け閉めに眺めるだけだった「マハ」を、ある時、ふと使う気になって、紙包みを開いた。枯れかけた草の葉のような深い黄土色の石鹼だった。干し草を思わせる野生的な香りが鼻をついた。香りもまた黛先生らしかった。

その後、輸入石鹼を売る店を知り、使うたびに六代目と黛先生を頭に浮かべながら、私は時々「マハ」を楽しんだ。少し前のこと、実に何年ぶりかでその店に行ったら、「うちには置いてません」と言う。店員は「マハ」の名も知らないようである。デパートにも見当たらない。

スペイン大使館に問い合わせしてみた。電話口の女性が「ああ、マハ。今は輸入してないかもしれません。あれは香りがきつくて」と小さく笑って、はっきりしたことを調べてみると言ってくれた。会ったこともないその女性が、せつないばかりに懐かしかった。ふいに、舞姫・黛節子の不在が胸に満ちた。

先生が「マハ」を連れて行ってしまわれたのではないか。そんな気がしきりにした。

節子さんを偲んで

長唄協会相談役・佐門会相談役

人間国宝 杵屋 佐登代

節子さんは、いつお逢いしても大輪の花のように明るく、あんなにお元気でしたのに、思いもかけない突然の御訃報をきき、本当にびっくりいたし、今でも信じられません。

節子さんは、長唄を私と同じ四代目杵屋佐吉師に習い、とてもいい声で、佐吉師が歌舞伎座で大ざらいをなさった時は、一人舞台で「吉原雀」を唄われました。大変いい出来で御自身もとてもご満足で、古いことなのに、二人で逢うたびに必ずその話が出て、楽しんだものでございます。

舞踊家としてはもちろん若い頃から皆さんに期待されておられました。いつもご実家の向島のお母様とお二人で、とてもとても美しい親子さんで、そのお姿が今でも目に残っております。節子さんは私をととても慕ってくれて、将来のことなどよく語り合いました。

節子さんは古典から、新しい民族舞踊団を作るなど、大変な苦勞をなさいました。頭の良い方でしたから、まだまだ沢山のお仕事をなさりたかったことと、残念に思います。

只、なにをなさるのも御一人、新しいものを作る苦勞というものは、並大抵のことではなかったと、深く深くお察し申しておりました。

せっかくの舞踊団も黛さんが急に亡くなられたので、あとはどうなることと心配しておりましたが、この度立派な方々の御後援を得て、再び舞踊団の発展を見る事が出来、節子さんは、あの世でどんなによろこんでおられる事でしょう。御後援下さった方々に厚く御礼を申し上げるとともに、どうぞ今後共よろしく願い申し上げます。

今、ふと、ある年の正月、私が唄って節子さんが踊られた「七福神」の事がなつかしくなつかしく思い出され、ひと言記させて頂きました。

合掌

黛 節子様を悼んで

社会福祉法人鶴風会 理事長

倉島医院 院長 倉島 摂子

黛節子様が彼岸に旅立たれてはや一年が立つのでございますね。今でも電話のベルが午後9時ごろ鳴ると「あら黛さんかしら」とふとそんな錯覚をおこします。先輩の臼井潔子先生より御引合わせいただいたのは二十年前の、赤坂の無量庵での会食の折でございました。以来知悉の友として20年以上のおつき合いをさせていただきました。私が障害児療育に携わって募金に東奔西走の明け暮れであることを深く理解されて、個人の御寄附はもとより、発表会の折のプログラムの売り上げを全部、御寄附いただきました。また毎年バザーに沢山の品物をご提供下さり「私は応援団長よ」といつもはげましてくださいました。御蔭様で障害児療育に機能訓練を含めて一番之が最高という新しい施設が3年以上の歳月がかかりましたが今年5月に竣工いたしました。黛先生に是非みていただきたかった。みせたかったと残念です。思えば2年前の平成6年秋の一夜、私宅中野の「あばらや」で、おもたせの茶巾鯉に手作りのきんぴらと里芋とこんにゃくの煮付をほうばりながら、つかれたように民俗舞踊について、現在の医道の在り方について、交互に理念を理想を熱っぽく若者のように心をはずませて語り合いました。5時間以上も。二人は約束しました。これからの人生、おもねらず へつらわず こびず 背すじをのばして、頑張りましょうね。と、溢れる涙をぬぐいもせず手を取り合って自が言葉に酔いしれた一夜でございました。これからも時折このようにして会いましょうと名残り惜しみつつわかれたのでございます。私はそれから二カ月とたたず病床の夫の看護と施設の建築と文字通り寸暇のいとまない日々をおくり、平成7年9月には膝を痛めて歩行困難という辛い日々を送っておりました。そこへ黛先生の訃報をいただいて愕然といたしました。12月には夫にも逝かれて、平成7年は辛い悲しい年になりました。1年間偲んでは、ご冥福を祈るという日々でございましたが、お心にかけておられた「財団法人 黛民族舞踊文化財団」が先生の御遺志を立派につがれて業績をあげられておられ、いかばかりかおよろこびかと、これからのご発展を念じあげております。

黛 節子さんの思い出

早稲田大学名誉教授 評論家 郡司 正勝

大輪の南国の華が、いっばいに開いたままで、一夜にして落ちてしまったような、鮮烈な印象を残して、黛節子さんは亡くなってしまった。

舞台も拝見し、よく研究所へもお招きを受けたが、わたしの黛さんの鮮烈な印象は、民俗芸能の探訪の旅先のこと、忘れられない情熱を傾けつくされている姿だった。

西馬音内の盆踊りは、民族芸能でなく、民俗芸能というべきであろうが、東北の夏の闇のなかで、端縫に編笠、あるいは彦三頭巾で踊る、人ごみのなかで見学したとき、お出会いして以来、ちょいちょい偶然に各地の現地でおめにかかる機会があった。いつも情熱をもてあますように語られたが、晩年は、中国の雲南の少数民族の舞踊に傾倒され、原地の方々をお招きするほどの熱誠をつくられて、少しも衰えることがなかった。

わたしはたびたび中国へ行ったが、雲南へゆく機会がなくて残念であったが、いまは絶えてしまった12年に一度行われる沖縄の久高島の最後のイザイホウでお出会いしたお姿が忘れられない。南国のつよい日差しを浴びて、神になるナンチュたちの儀式と踊りを、地上にどっかと腰を下ろして、5日間、その人々のとり巻く輪の中で、身じろぎもしないで、ナンチュたちと同じように天にも昇るように輝いていた。あの燃えるようなハイビスカスのような黛さんの魂の輝きを。

昭和53年の久高島の祭りの日を。



花 風

黛 節子

写真撮影 清水三郎

大輪の牡丹のような 黛 節子さん

声楽家 加古 三枝子（小泉 三枝子）

黛節子さんとおつきあいは、私の主人（民族音楽学者、小泉文夫）を通じてのものでした。初対面の時から、まるで10年の知己のように、ほがらかに、ざっくばらんに話されるので、私の数あるお友達の中でも、一番気の合った方といえるでしょう。その方がお亡くなりになったということを知り、とても信じられませんでした。私は心の中で「どうして、どうして…」をくり返し、彼女を奪っていった力のようなものを恨みました。

節子さんとは、たびたびお会いしていた訳ではありませんが、たまにお会いした時は、いつも強烈に印象に残っております。

かつて主人が存命中、郡上八幡の盆踊りを録音するために芸大のゼミの学生を大勢つれて行ったことがあります。その時、節さんも一緒だったらしく、東京の私の家でみんな集まって盆踊りを再現したことがありました。その時、「春駒、春駒」といい乍ら、派手に手足を動かし、それは、それは楽しい盆踊りの賑やかな雰囲気がいっぱいで今でも忘れられません。

水上勉氏の「越前竹人形」を舞踊化した舞台も見せて頂きました。これは絶品でした。今まで異なった種類の踊りはよく見ましたが、それらとは全く違いすばらしいものでした。

1983年に主人も亡くなり、あまりお目にかかる機会もなくなりましたが、割合最近、芸能山城組のパーティーでお目にかかりました。節さんは私から割合離れた所になっておられ、ただ一人和服を召しておられました。

私は節さんとは気がつかず、「なんと美しいかたがみえているな!」と思って遠くから眺めておりましたら、つかつかと私の方へ近づいてこられ

「私、黛節子よ」

と、おっしゃったのでびっくりしました。

その時は、まさに大輪の牡丹を思わせました。今は、ひたすらにご冥福をお祈りいたしております。



越前竹人形

黛 節子
写真撮影 清水三郎



越前竹人形

黛 節子と三谷 昇
写真撮影 清水三郎

黛 節子さん

五條流家元 五條 詠昇

黛さんのリサイタルで、「智恵子抄」に深い感銘を受けたのは、もう45年も前のことです。

鋭く豊かな感性で創られた創作舞踊と、日本の民俗舞踊を舞台芸術に昇華させた数々の作品は、今でも私の胸底に色鮮やかに刻まれています。「小原木」「想夫恋」などの構成や衣装の感覚も見事でした。

今ブームの宮沢賢治の、「原体剣舞連」を舞踊化したのも、1958年の黛さんでした。

私が請われて黛さんのリサイタルで踊ったのは、1960年と1962年の「黛節子舞踊団 日本民族舞踊集」（第5集）と（第6集）です。当時黛さんと踊った「かっぱれ」や「安来節」が懐かしく思い出されますし、黛さんの舞踊活動を一貫して扶け、作品の製作、構成、演出などを担当された、財団の現常務理事大野晃氏が、舞台と一緒に「カチャーシ」を踊られたことも楽しい思い出です。

私が今日、日本舞踊と併せて日本民俗芸能の研究に携わっていることは、このようなご縁にも影響をうけているように思います。

他の舞踊家にさきがけて民俗舞踊に着目して、その作品の発表も「日本民謡舞踊集」から「日本民族舞踊集」と次第に意識と視野を拡大し続けて、独自の世界を築かれた黛さんが、ご自分の職名を「日本舞踊家」から「日本民族舞踊家」と名乗りを変えられたことに、黛さんの強い信念がうかがえます。

近年、中国舞踊と交流を深められたことも、その志の表れでしょう。

先日、赤坂を通して、しみじみ黛さんを偲んだことでした。初めてお宅を訪ねたのは1960年の春だったと思います。今の黛ビルの処は、簡単な柵の中に植え込みに囲まれた木造のスタジオがありました。黛さんの明るい笑顔と、当時ご健在の、しかしお眼がご不自由ながら若い黛さんを支えられた母堂の、しっかりした声音が蘇ってきました。今頃は、母堂と楽しい語らいをして居られるのではないのでしょうか。



原体剣舞連

黛 節子と舞踊団
写真撮影 清水三郎



安来節

黛 節子
写真撮影 清水三郎

セピア色の幻影

前共同通信記者
大新東グループ広報室長 近藤 あきら

竹を割ったようなものの言いかたが爽快なお人であった。
そのときも、きぱっと一刀両断、歯に衣着せず言い切った。

「近藤さん、あれはもはや踊りじゃありません！」

私がまだ記者をしていた昭和47年夏、「日本の芸能」という企画ものの取材で京都市の郊外・久多に伝わる花笠踊りを見に行った。

久多は市の中心から約50キロ、京都市と滋賀県の境、三国峠の懷に隠れ里のように横たわる小さな集落である。江戸時代まで若狭と京都をむすぶ“さかな街道”として栄えたこの地に、室町時代の風流（ふりゅう）をルーツとする花笠踊りが伝えられている。

深い闇の中、白とグリーンを基調とした花笠を上下させ、ゆっくりステップを踏むこの踊りには花の精かと思わせる典雅な風韻があって、私はこれをどう表現するか大いに迷ったことを覚えている。幸い、見物客のなかに華道界の大物と伝統芸能に詳しい学者がいたので、二人の話を織り込んで記事にまとめた。

そのとき、地元の人から「去年は黛節子さんがきてましたよ」という話をきいたのである。私は早速、赤坂のビルに先生を訪ね、花笠踊りについてうかがった。

初対面のうへ、門外漢の頓珍漢な質問にも神妙につきあってくださった先生は、やがて、あの大きな目をギョロリと見据え、さももどかし気に言うのであった。

「あれは、もはや踊りじゃありません。昔は花笠を頭にかぶり、腰を低くして踊ったものです。それでこそ踊りです」

私は、目から鱗が落ちる思いであった。しかし、これ以上ボロを出さないうちにと写真一枚をお借りして早々に退散した。写真には久多の花笠踊りをヒントに、46年1月に発表した「夏灯ろう」を踊る先生が写っていた。私は、この写真をぜひ使うようデスクに念を押し、新聞にはそのまま載った。

今回、本稿を草するに当たり当時のスクラップを取り出した。プーンという古新聞特有の匂いとともに、セピア色に変色した先生の舞台写真入りの記事がでてきた。

写真を見て、私はあらためて納得した。まさに腰をぐっと落とし、一点を凝視して踊る姿には、芸の神髄をきわめた人の凜とした品格と気品にあふれていた。思えば、ちょうど四半世紀前の写真である。

ふと、セピア色の先生がスクラップブックから抜け出し、華麗な民族衣装をまとうて踊り出した。久多の花笠踊りである。踊り終えた先生は、ツカツカと近寄って語りかけてきた……。

「近藤さん、わかった？ これがホントの花笠踊りというものよ」。



夏灯ろう（久多の花笠踊り）
黛節子

写真撮影 清水三郎

黛 節子さんを偲ぶ

=芸術祭参加と黛アート・サロン=

舞踊評論家 桜井 勤

黛節子さんは、大正7年2月11日生まれで私とは同年だった。藤間節子時代は知らず、昭和38年に東横創作舞踊の会で踊り、その年の11月に「黛節子舞踊団 日本民族舞踊集」(第6集)が東京文化会館でひらかれた。これは第18回芸術祭参加で、その年から芸術祭審査委員になった私は日本の民族舞踊の舞台化のあり方に興味を抱かされた。まだ若かった黛さんや林一枝さん、五條雅巳(現在の詠昇)さんや大野晃さんも出演していた。

昭和42年3月に黛ビルが竣工し、黛アート・サロンが始まった。このサロンにはさまざまな催しがあり、日本のものだけでなく、中国雲南省舞踏家協会との交流による催しは大きな収穫だった。

芸術祭参加は、昭和42年(国立小劇場)、昭和45年(東横劇場)と続けて行われ、水上勉原作『越前竹人形』の主役を演じた黛さんの舞台は鮮やかに目に浮かぶ。昭和50年、51年には日生劇場で日本の民踊や『桜樹散華』を続けて上演した。この作は大野晃演出で京都北野の天満宮に残るしのはら一座の踊り芝居を現代に再現してみせた。女(黛節子)の前にあらわれた若い男(志垣太郎)が何者かにより殺された。男を愛していた女は散る桜とともに身を任せるといふきわめて幻想的な話である。残念なことに芸術祭参加に対しての受賞はしなかったが、見る側にとっては、踊り一筋に生きて来た黛節子さんの情熱が強くイメージとして残された。



桜樹散華

黛 節子と舞踊団 写真撮影 清水三郎

たが、見る側にとっては、踊り一筋に生きて来た黛節子さんの情熱が強くイメージとして残された。

黛さんの長い一生の中のほんの一角のみを書いたが、黛アート・サロンで残された数多くの仕事は、今後も大切に継続して欲しいものである。黛さんが未だ仕事半ばにして倒れられたことが惜しまれてならない。

(社)日本芸能実演家団体協議会 参与 鹿海 信也

黛節子先生との出会いは、いつであったか思い出せないが、先生のお名前は、確か日劇で評判の高かった八重山諸島の民族舞踊公演などの振付指導で、わが国の民族舞踊家の第一人者として、私は若いころからよく承知していた。だから、先生に初めてお目にかかった時には「この人があの有名な黛さん」と畏敬の念を持ったことを覚えている。20年前ぐらいからのお付き合いと思うが、黛アートサロンの小公演は欠かさず拝見し、たのしく勉強になった。そのほか、年間、いろいろの行事が企画されたが、そのような機会には多彩な顔ぶれのお客さんがみえていて、先生の中広がりがうかがえた。多くの人々が、先生の人間的純粋さ、民族芸能に対する造詣の深さ、ひたむきな熱情に声援を送られていたに違いない。

そんな方々の多い中で、私などは殆んどお役に立つようなことは無かったが、財団法人設立後は評議員の役を仰せ付かって、会議に出席してみると、財団の事業運営は殆んど先生の私財寄付によって成り立っていることを知り、頭の下がる思いであった。最近では中国雲南省少数民族との交流に力をそそがれ、不便を押して彼地を訪問したり、彼地の舞踊家を招へいし研究会を催したり、岩手や長野に案内して民俗芸能の現地交流をされていた時の先生のお顔は活々としていた。先生は筆まめな人であった。私などにも、よく手紙を書いてくださったが、多くの方々にもよく手紙を出されていたのではないかな。その気くばりは民族芸能に対する情熱のほどばしりのように思えた。

あまりお役に立たない私であったが、平成2年、ウィーンに本部のある国際民族芸術組織(I O V)の日本支部設立問題が持ち上がった時、赤坂の黛サロンの階上の先生の居間で、二人きりで何時間かお話しをしたことがあった。先生の負担過重をおもんばかり、もう少し国内体制を整えてからではどうかという私の消極論を、この話に乗り気の先生が渋々聞いておられたことを思い浮べる。先生の倅を偲び、御冥福をお祈りするとともに、先生のお志しを忘れずに、財団の発展に微力を尽くしたいと思う。

節子先生の「ヨォーシ！」

=雲南省の思い出=

阿寒湖ユーカラ座座長

アイヌ歌舞伝承者

四宅 豊次郎

1994年、中国舞蹈家協会雲南分会の招きにより、「黛民族舞踊文化財団」一行は3月23日から4月4日までの13日間、雲南省を文化交流のため訪問しました。

黛節子先生を団長に、黛莉香さん、花柳衛吉さんの日本舞踊家と、四宅豊次郎、日川キク子、野宮セツによるアイヌ舞踊の6名であった。雲南省は高山地帯であるが天候温暖、風光明媚で、25の少数民族が住んでいる自治区であり、各種の豊かな芸能文化をもっていると聞く。私は、その人々との初めての交流に期待し、胸を弾ませて出発した。

昆明から个旧、石屏、文山と巡り、多くの民族と歌謡や舞踊の交流をして、とても有意義な日々を送ることができました。

中国では、昼、夕食会に必ず要人や指導者が同席して礼儀正しく来賓をもてなす。（「日本では、残念ながらこれ程の気配りがないわネー」と節子団長がつぶやいた。）

これまで、どのくらい乾杯を重ねてきたことか。3月28日、石屏県文化局、呉志剛局長の「カンペー」の音頭で夕食会がはじまった。数回の乾杯の後、突然、節子団長が杯を持って身振りよろしく呉局長に対し大きな声で「ヨォーシ！」と言った。どういう意味か理解できない呉局長に通訳を介して、物事が良いと言う事で、気分が良い時の表現、また事を始めるときの決意を表わすと説明すると、彼はとても喜んで立ちあがり杯を高々とかざして「ヨォーシ！」と。それからは会食している皆さんが、互いに杯を干しては酒を注ぎ「乾杯！」「ヨォーシ！」を交互に連発し座が盛り上がった。節子団長式「ヨォーシ！」はその後、雲南省の各地で全ての会食の席で採用された。1年数ヶ月の後、新聞紙上で黛節子先生のご逝去を知りました。今年は、日中文化交流協会が創立されてから40周年になるというので、記念事業として中国文学芸術界連合会の代表6名が日本に招待され、北海道へも訪れました。



雲南省文山州 壮族の村の黛節子

私も雲南省との交流で縁ができ、一行を阿寒湖アイヌコタン（集落）へ案内し、互いに友好を深めたところでした。7月8日の夜は東京で日中交流レセプションが催され、自分も招かれたので上京しました。

そのおりに、赤坂にある黛財団事務所により、故黛節子先生の仏前に線香をたむけました。遺影の顔は相変わらず微笑んで今にも「ヨォーシ！」と語りかけるような様子。生前の先生はこの言葉がとても気に入っていたよう

です。何か心に決するものがあったのでしょうか。さて、その後も雲南省のどこかで、日中文化交流の掛け橋になり大きな功績のあった黛節子先生を偲んで「ヨォーシ！」と言いながら供養しているかもしれません。

”ピリカノ モコラン

（安らかに おやすみなさい

ク ノミ”

と私は 祈ります）



紅河州个旧にて 雲南省の舞踊家たちと

写真提供 四宅豊次郎

黛 節子さんの一周忌

神奈川大学経営学部教授 七田 基弘

黛節子さんが逝かれて早くも1年が経つ。わたくしが黛さんに始めてお会いしたのは、わたくしが国際交流基金に勤めていた昭和57年ごろのことで、隣の部屋におられた伊達邦美さんから良い人を紹介するから会えというご指示があったときだった。外国から人を招きたいというお話で、その話はそれで手短かに終わったが、わたくしは舞踊のことはずぶの素人なので、これは善い機会だと話を承ることにし、しばらく黛さんの時間を拝借したのが、お付き合いをいただくきっかけであった。

その後も、わたくしの部屋に來られて相談をして帰られた。たとえば、黛財団で七夕の夕べの会を開きたいが、旧暦がよいか、新暦がよいかというご相談もその一つである。新暦の7月7日の頃は未だ梅雨がぐずつき、彦星と織り姫の逢う瀬も、雲に隠れては気の毒ですね、などと話しながら、天文学の先生をご紹介申し上げた。早速、訪問され、相談して、旧暦に決めたわ、だけどあの先生面白い先生ね、すっかり星の話が面白くなってしまったわ、というお電話をいただいた。

黛さんのお宅から、わたくしの祖師谷の宅まで車では、簡単に往復できるので、タクシーで何度かお出でいただいた。お土産に丹精された月下美人の根分けの鉢を頂いた。夏の夜、八時にボンと大輪の花を咲かせ、馥郁たる香りを振りまいてくれる。お返しに日本桜草の小株を幾つか差し上げたら、それが増えたといって大変に喜んでいただいた。

一昨年、老朽化したわたくしの家を建て替えることとなり、その話もしながら、新築が終わったら、また来てくださいね、とお話をし、黛さんも、ぜひ伺うわ、と楽しみにしてくださっていたが、再び来ていただくことも無く、黛さんは黄泉の国に旅立たれてしまった。頂いた月下美人も、仮住まいの、わたくしの世話の不行き届きで、昨年の冬に先生の後を追った。返す、返すも無念である。

晩年には、中国、とくに雲南地方の少数民族の舞踊と日本の舞踊、沖縄の舞踊、韓国の舞踊の比較に力を入れておられたので、ぜひしかるべき研究機関と協力して研究面でも業績を上げていただくようお願いをした。また、オーストリアのヴァイグルさんが主催している国際民族芸術機関（OIFA）の申し入れについても、黛さんは終始、情熱と誠意をもって接し、どちらかというとのめり込んで仕舞われ勝ちなので、心配をしたものである。東京芸術大学の古池さんにヴァイグルさんとのやり取りの手伝いもしていただいた。

黛さんは、永遠の乙女であった。未知のものに対する好奇心と探究心、きらきら輝く瞳が黛さんの魅力であった。彼岸で、黛さんは、新しい経験に胸を膨らませておられるのではないだろうか、と、そんな気がする。

若気の過ち

日本訳詩家協会 会長 ホセ・しばさき

その頃先生も私も若かった。昭和で言うなら31年頃だったであろうか。

娘に踊りの手ほどきでもして頂こうと思ったのか、私が先生に会いたかったのか定かではないが、ある日私は娘をつれて赤坂のおけいこ場にお伺いしことがあった。

まだ先生のお母様がお元気な頃である。先生は子供たちに「証城寺の狸ばやし」かなにか教えていた。娘は早速仲間に入れて頂きたのしそうであった。

そんなわけで、私は娘を4、5回つれていったような気がする。娘は先生にもお母様にもかわいがられて、ここへ来るのがたのしそうであった。

ところが、ある日、私は先生に大変なことを打ち明けられてしまった。「この子を私に頂戴」というのである。手許で育てて、先生の後継者にしたいというのである。

いずれは他家に嫁ぐ身、いつまでも手許においておけるわけではない。下手に男で苦勞させるくらいなら、この道で苦勞させた方がまし。ふとそう思った私は、芸事は六歳六ヶ月という言葉もあり、この子なら大丈夫という先生の氣迫と情熱に動かされて「いいでしょう」とゴー・サインを出してしまったのである。女房も娘の頃は

花柳門下。わかってくれると思ったのが大きな過ちであった。

家へ帰ってこの話をすると、先生がかわいくて仕方がないという娘は、女房にとっても同じであり、それ以上の話をする前に、「駄目!!」

こんな話を直ぐ出さず、暗黙のうちに先生の許に通はせ、中学生くらいになったところで、娘の意思としてこの道に進みたいと言ったなら、女房は決して「駄目!!」とは言わなかったであろうに。

この娘、大学も職業も自分で選び、今はその道のキャリア・ウーマンになってしまっている。

あの世で先生は「私のところへ来ればよかったのに!」などと未練がましいことを思っておられまい。

私を「ホセ!!」と呼び捨てに出来る先生であった。自分の進路を自分で決め、それに向かって歩いている娘を見れば「私の目は狂っていなかった」と喜んでおられるのではあるまいか。遠い昔の話である。

孔雀の舞

鶴岡八幡宮 宮司 白井 永二

黛節子さんの急逝には大変驚きました。その思いは何時までも続くことと思います。哀悼の情も尽きないでしょう。

黛さんとの初対面は鶴岡八幡宮の舞殿で「静御前の舞」を奉納された時。一行の中に中国の雲南省の方々が混っておられました。昭和61年5月のことでした。

その時、夫々の民族のもつ伝統舞踊の交流育成という大きな念願などを、熱捧ともいうべき深情をこめて吐露され、そのひたむきの情熱に心を打たれました。雲南省の人々が共に民族衣裳を着ておられた。昆明は曾遊の地であり、市街地外は東導してもらえなかった経験をもっていましたので、その地からの来訪と教へられ感激し嬉しくさえありました。そして黛さんの舞踊の道への情熱の高潔さを膚で感じたわけです。

舞殿での黛さんの舞は終わりました。三々五々周辺の人々は夫々の方角に去って行きましたが、数人の人達は立ち止っていました。勿論雲南の人々です。私は「皆さんもどうぞ日本の神様にを見ていただきなさい。上に昇って踊って下さい。」とためらいを押退けるように強く懇請しました。とまどいを現わしながら団員の一人が平服(民族衣裳)のままで「孔雀の舞」を舞われました。

伝統の舞踊の中から生れた孔雀の動態を表現した新作ではなかろうかと直感して見せてもらいました。圧倒される迫力がありました。強い印象でした。その方は刀美蘭さんと聞きました。

大分大学の助教授でシイサンパンナの民俗を探訪した写真集。それを机辺から持出して談笑の間ここにあるよ



鶴岡八幡宮舞殿にて静御前を舞う 黛 節子

写真撮影 しやっせ・ただお

うな民族舞踊もなさるのかと頁を開いてお見せしました。刀さんは勿論とうなづきながら「これは私の妹です」と中心に撮っている女性を指されたのにはお互いに驚きました。十二億の民、一億の民、そして書籍の写真は一秒にも足りぬ瞬間の撮影、それが神前の舞の後で相遇したわけです。その本は著者に直接願って頒けてもらった特殊出版でありましたが、見開きにこの出遇いの情況を書いて刀さんに贈呈しました。この人達と黛さんを仲に一夕を楽しく過しました。段々開けて行く胸襟の奥を伺うことが出来て忘れ得ぬ一日でした。

理を超えた黛さんと傣族の舞踊家との交友に私も引き込まれたわけです。そしてこうした伝統舞踊が互いに尊重されながら体で表現し合い理解することの出来る人々、そしてそれを為し得る事業の推進を羨ましく思い同時に貴重な実感を重ねる意味をも肝銘したことでした。

黛民族舞踊文化財団の発展を心から祈ります。

日中舞踊交流に不滅の業績

日本中国文化交流協会 専務理事 ^{しらと}白土 ^{のりお}吾夫

黛節子先生がお亡くなりになって、まもなく1年を迎えようとしておりますが、いまでも先生のあのお元なお声の電話が飛び込んで来るような気がしてなりません。

黛節子先生が初めて中国の雲南省を訪問されたのは1985年の4月のことでした。前年、ちょうど東京で国際ペン大会が開かれていたとき、私ども日本中国文化交流協会は、中国文学芸術界連合会代表団を日本にお招きしました。その団員の中に、雲南省歌舞団の演出家で、舞踊家でもある周培武先生がいらっしゃいました。周培武先生は、赤坂のアートサロンに黛先生をお訪ねし、お互いの民族舞踊を披露し、大いに交流を深められました。この交流を契機として、黛先生と雲南の舞踊家との交流が始まりました。私たちは、黛先生の最初の雲南御訪問から協力させていただいておりますが、いつも先生の情熱と迫力に学んでおりました。

黛先生は、1986年3月に黛民族舞踊文化財団を創立され、財団の初めてのお仕事として、雲南省舞踏家協会常務副主席の劉金吾女史を団長とする代表団を日本にお招きになり、以後1995年までに雲南省舞踏家協会代表団を5回、さらに傣族の象脚鼓の演奏家などをお招きになりました。また、黛先生も代表団を率いて4回雲南省を訪問されるなど、毎年活発な民族舞踊交流を続けられました。黛先生の日中民族舞踊交流に傾けられた情熱を、私たちは忘れることができません。

特に、劉金吾女史とは、日本と中国の民族舞踊、稲作舞踊文化について共著を出版したいと、その準備を進めておられました。志し半ばでお亡くなりになったことは胸のつまる思いです。

黛民族舞踊文化財団が、黛節子先生の熱い思いを受け継ぎ、日中両国の民族舞踊文化交流の発展に寄与されますよう、願ってやみません。



1984年5月10日黛アートサロンにて周培武氏と黛 節子

黛さんの想い出

学習院大学文学部教授 諏訪 春雄

黛さんと知りあうきっかけになったのは、私が編集委員をしている『日中文化研究』（勉誠社刊行）というムック形式の刊行物であった。1992年の7月に刊行された『日中文化研究3』に、私は「蓑笠と杖の民俗一日中農耕儀礼の構造」という論文をよせた。当時、アジアの稲作の芸能につよい関心をおもちになり、中国の雲南省や貴州省の少数民族の方々と交流をかさねていた黛さんは、どこかでこれをご覧になって、わざわざ私の研究室に訪ねてこられた。

私は初対面で黛さんの情熱にうたれた。妙な言い方になるが、二人はたちまち意気投合した。ちょうど、そのころ私は、学習院大学の東洋文化研究所のなかに、アジア文化研究プロジェクトを組織して、中国文化と日本をはじめとする東アジアの文化の比較研究に乗りだしていたので、最初から黛さんに参加していただいた。また、黛さんも中国から民族舞踊団をまねくような時には、なにかと私に相談をもちかけられた。

黛さんの舞踊の舞台はそれほど多くは見ていないが、しかし、型からはいつて型をぬけ出した自在な動きにはいつも感服させられた。ことに強い印象となつてのこっているのは、学習院の大講堂の広い舞台で、アイヌの古式舞踊の方々と自由にのびのび踊られた姿である。1994年の7月のことであった。私どものプロジェクトの催しにアイヌの方々をお招きしたときに賛助出演して下さったのであった。

「先生、私ね」とややハスキーな暖かい声が、今も電話の向こうで聞こえるような気がする。アジアと日本の文化や芸能の解明のために、一緒にやりとげたいことは山ほどのこっているのに……。

“ヨイヤナ・セツチャン”

日本伝統芸能研究所長

白梅学園短期大学教授 高橋 秀雄

「ヨイヤナ・セツチャン」

黛節子さんと私の合言葉である。出会った時には、どちらともなくこの合言葉を掛け合う。

「ヨイヤナ・セツチャン」の出自は、秋田県の「西馬音内の盆踊り」の囃子ことばである。笛・太鼓・小鼓・三味線に乗せて唄われる盆踊り唄に合わせて踊り子が、「ヨイヤナ・セツチャー」と囃す。

これが二人の間では、「ヨイヤナ・セツチャン」となった。「佳いやな、節ちゃん」なのである。

長唄の人間国宝杵屋佐登代さんとは若い頃からの知り合いであり、そんなところから節子さんとは早くに知りあった。私自身は文化庁（前文化財保護委員会）の主任文化財調査官として、無形文化財や地方の祭りや民俗芸能である民俗文化財の指定の仕事にたずさわっていたので、日本の伝統芸能に関係する人たちとは広くおつきあいをさせて頂いていたのである。

節ちゃん（この呼び方が馴染んでいるので節ちゃんと呼ばせて下さい）は、日本舞踊に精進しておられながら、新しい日本の舞踊の創造に目を向けられ、日本の郷土に伝えられている唄や踊りを取りこんで斬新な舞踊活動を展開された。民俗舞踊を再構築して華麗な舞踊の舞台を生み出されたのである。

やがて、その目は日本文化のルーツである中国に注がれるようになり、中国の少数民族の踊りとの交流から新しい舞踊活動へと足跡を刻まれたことはまだ記憶に新しい。

舞踊に魅入られた節ちゃんは、舞踊を語っていると、その眼が輝きを増し、まるで神がかりになった巫女のようなになる。それだけ舞踊に生命をかけていたのである。

節ちゃんが巫女の世界を通り越して、神の世界に昇って行かれたことは寂しい。まるで隣りにぽっかりと穴が開いてしまったような気持ちである。

それでも私は呼びかけている。「ヨイヤナ・セツチャン」。心から御冥福を祈る。

女流義太夫 竹本 越道

黛さんは、私の出演する会の時にお花を下さったり、私事で恐縮ですが、受勲の祝いの会の時に来て下さって、黛さんが私の肩へ手をやった懐かしい写真があるんですけど、どこへしまいました事やら。今となると本当に懐かしい思い出となりました。

いつの事だったのでしょうか、もうずいぶん経ちますが、どこかの会社の社員旅行か何かの時、熱海に行きまして、私が黛さんに「酒屋」のサワリをお教えしたんですが、日本髪のカツラをかぶってやったんです。まさかカツラをかぶるとは思っていなかったものですから、写真も撮らなかったんですが、黛さんが「酒屋」をお語りになって、それも懐かしい思い出です。

また黛さんからのお話で、阿波踊を義太夫にして私が節付けをしまして、どこの放送局でしたでしょうか、行って演奏した覚えがあります。だから黛さんとはいろいろな思い出があるのですが、こちらも年をとって随分忘れてしまいました。

赤坂のお宅の方には何回かお邪魔した事があります。私は生まれてからこの方、くじというものに当たった事がないんですが、いつかお正月に招かれました時、くじが当たったんです。中に鈴の入った虎か何かの置物を頂きました。毎年七草粥の会を必ずやられたんです。

ご自宅の方へも、是非一度遊びにいらっしゃいと何度も誘って下さったんですが、なかなか都合がつかなくて、とうとう伺わずじまいになりました。ご病気という事を知らずにご自宅へお電話をしましたら、留守番の方にそれを伺いまして、本当にびっくり致しました。もう一度お会いしたかったと、それが残念でなりません。

私の中の黛さん

舞踊評論家 龍居 竹之介

民族舞踊家として黛節子さんの活躍ぶりは広く知れわたっている。いつもすごい人だと思ってきた。それにしても私自身は黛さんをあまり〈民族舞踊家〉の肩書だけの人としては意識していなかった、というよりそれ以上に何かにつけてありがたい存在の人であった。

それは何でもチャレンジしてみようという精神の旺盛な女性舞踊家と、スポーツ新聞の文化部記者というつきあいにスタートしているからであろう。

私が書いた黛さんの記事に興味を抱いた上司の山崎安治文化部長（この人もすでに故人である）は、公演も熱心にのぞいた。その結果、口では「元気のいいオバサンだな」といいながらも、すっかりファンになってしまっ

たのである。それ以後というもの「黛さんに何か頼みましょう」という紙面企画が大変通りやすくなって、ついには日刊スポーツなどという新聞ではまったく初めての連載エッセイまで書いてもらうことになる。題して「おどりおどろ記」。同僚だった映画担当の阿部喜久也記者がつけたタイトルで、黛さんはただ笑って「いいよ」といったのではなかったかな。その辺の記憶は定かではない。

何回続いたかも忘れたが、お蔭で赤坂へは充分通うこととなった。原稿の打合せや、受取りもさることながら、手料理をいただきながらの雑談が格別の味なのである。発言も大胆かつ自在で踊り同様、いやそれ以上に澁刺とっていて、話は弾み通しだった。

新聞にレジャー欄のようなものが誕生したときだったかには、家庭料理の紹介コーナーにも登場してもらったはずだし、飛んでもない話題について赤坂や荻窪へ電話してコメントを求めたりもした。

赤坂の家が消えてビルになってからの活動は凄味を増していったが、私にとっては次第に遠く大きな存在になっていくようで、時に昔の黛さんとは別人と思う気持ちもどこかにあった。正月の七草のときだけ、やっと以前の黛さんに会えた気がしたのは、多分かつての手料理の思い出と重なる部分があったためだろう。

亡くなる一年ほど前だったろうか、「小唄一緒にやろうよ」といわれたが、その口調には30何年か前の雰囲気満ちていて、ホンの一瞬、時間が止まった。

いま思えば無意識に昔の面影をちょっぴり残していつてくれたに違いない。やはり一生涯、面倒見のよい人だったのである。

それにしても、黛さんへの私のような思いは、一体、これから〈財団〉のどこへ寄せればよいのだろう。最後のチャンスに、一番肝心のことを聞き忘れてしまったようだ。

青春の声

文化庁主任文化財調査官 田中 英機

ライスロードということばは、黛節子先生ならではの造語である。学術上の〈稲作の道〉とか〈米の源流〉とか言わないで、芸術家はちょっと洒落て、軽妙にこれを命名した。

ライスロードに思い至り、それを深めることに邁進した晩年であったように思う。韓国や雲南・貴州の少数民族の生き方とその習俗や音楽・芸能が、詮じ詰めれば「米」にいきつくことを発見し、日本人との普遍を確認したとき、汎アジアのキーワードとして「ライスロード」ということばを自らの〈生命の指標〉にしたと思われる。

初代花柳寿美の新鮮なおどりに憧れ、歌舞伎舞踊の藤間勘斎の門で修業し、そのまま熟成していくはずの道を投げすてて、自由人黛節子となって創作舞踊に新境地を求めた青春。その青春のまま・老いることのなかった・晩年である。

昭和27年発表の「赤いローソクと人魚」「ひえつき唄」では、舞踊構成・演出の鮮烈さが光って、芸術祭奨励賞を受ける。これが一つの契機となって日本の民俗に着目、民間伝承の芸能がもつ素朴な生命力を、生きた舞踊作品に再生する試みに挑戦、次々とこの系統の作品を発表し、我が舞踊界にユニークな新生面を拓いていった。

その開拓者。「田園詩曲」「南風の乱舞」「土塊」「駒踊り」

「小原木」など、曲名からして日本の民俗色を打ち出したものであった。「舞台」芸能から「民俗」芸能への心の傾斜がわかる。そののめり込みが、必然的にアジアの「民族」芸能に拡がり、やがて「ライスロード」という思想としてのライフインデキスを獲得した。

黛節子先生はアジアの中の日本の「民族舞踊」を生み出す用意をし、さてこれからという折に急逝された。その志は次の世代が継がねばならない。おたおたとすると、すぐ「エイちゃん元気イー」という、あの「青春の声」が聞こえてくるのだ。



小原木

黛 節子

写真撮影 清水三郎

思い出

谷村 美恵子

当時、節子さんも私も牛込区（現新宿区）赤城下町と言う所に住んで居りました。神楽坂からそんなに遠くない所です。牛込区では最も歴史の古い赤城小学校の同じクラスで学校の往復も一緒学校から帰ってから一緒に、鞆を置くと、どちらかの家で夕方まで遊んでいました。本を読んだり外へ出て鬼ごっこをしたり縄とびをしたり。何時も一緒にいると雰囲気が何となく似てくるものなのではないでしょうか、ご近所の方に双児さんみたいね、と言われた事がありました。

節子さんのお母様は向島の方で大きなお仕事をしておられ節子さんはお祖母様と女中さんの三人暮らしでした。お母様は時折見えていらした様に記憶しております。利発で負けず嫌いでハキハキしておられ、何が原因であったのか全く忘れましたが私が校庭の隅でメソメソしていた事がありました。“谷村さん、どうなさったの？”と私の顔を覗き込まれた節子さんはお姉様のようなお母様のような態度でした。きっとお母様から受けつがれたものを自然と身につけて居られたのでしょう。小学校五年生の頃のことです。二人共にお庭の草花をいじるのが好きで、お互いの庭の小さい草花を取り替えっこして植えたり、種をまいたりしました。何故かその中で鳳仙花が強く印象に残っています。花が終って実になり、実の袋がくるくるとまわってパチンと種がはじけとぶ鳳仙花。東京のその頃のまだ透明な空気の中の炎天下の鳳仙花。

小学校の卒業と同時に節子さんとはお別れとなりました。母上のお家の方へ行かれたからです。お引越をして行かれる時、これから一緒に踊りのお稽古なさらない？とお誘いを受けました。私はそれをせず、節子さんは、その時から一直線に進まれたのでしょうか。

舞踊家となりし友あり鳳仙花

丸の内線の赤坂見附を通過するたび、想いは貴女のところへとんで行きます。何故節子さんは急にいなくなったのでしょうか。電話でいろいろお話をし、そのまま1年位御無沙汰をして終ったせいか、私に取っては思いがけない事でした。お話が尻切れトンボでまだ途中でした。私の心の中でお話が終わっていなかったのに、まだ途中だったのに、と言う想いが湧いては消えて行きます。

七草のお祝ではにこにこ元気に踊っていらしたのに、何時の間に貴女のお体の中に異変が起っていたのでしょうか。貴女らしく華々しく活躍され、節子さんの大好きだったお母様にきっと抱きかかえられる様にお迎えを受けられ手を取り合って旅立たれた事を私は、はっきりと思います。

そして民族舞踊家黛節子さんは残された方々の為、絶えず見守って力強い声援を送っていらっしゃる事を、信じて居ります。

節子さん、どうぞお心安らかにおすごし下さいますように。



小学校入学時

節子さん



小学校4年生の夏休み伊香保温泉のつり堀にて
左が節子さん右は谷村美恵子さん

写真提供 谷村美恵子

亡き節子さんを偲んで

トルコ共和国駐劄特命全權大使 遠山 敦子

私がはじめて節子さんにお目にかかったのは、文化庁文化部長の時でした。以来折にふれ、民族舞踊の伝承と普及のために情熱を傾ける貴女の理想の高さに共感を覚えて来たのでした。

昨年秋、私が病院へお見舞いに伺った時は丁度貴女が眠っていらっしゃる時でした。お起こしするのが忍びがたく、そのままそっと失礼致しました。でもそれが生前の貴女にお会い出来た最後でした。

後で私が来たことを聞かれた貴女は、涙を浮かべてよろこんで下さったと伺い、私も胸がつまる思いでした。

貴女の無邪気さと情熱的にひた走る姿は、人の心を揺さぶる芸術家ならではの飾らない生き方その儘だったと思います。国内に止まらず国際的にも活躍の場を拓けられていた貴女の御努力に、私は敬愛の念を抱いております。

貴女御自身が自らの手で編集された最後の「舞踊文化」の巻頭に、貴女と私の写真を掲載されたのも何かの御縁かと思い、こうして筆をとらせて頂きました。

心安らかにといっても、活発な貴女のこと故、決して静かにしていられとは思えませんが、改めて心静かに御冥福をお祈り致します。

日中友好民族舞踊交流の集い

徳山古典芸能保存会会長 長濱寛二郎

平成4年8月14・15・16日

あの感動の3日間から、すでに4年の歳月が流れましたが、あの時、あの場面の感激のひとつまひとつ鮮かに思い出され、いつも明るい温顔で笑みをたたえられ情熱に充ちた先生の面影が心の底深く焼きついております。

山深いここ徳山の人々にとって、初めての国際友好親善、民族舞踊交流の催しであり、感激ひと

しおでありました。はるばる中国雲南省から6人の舞踊家をお招きしていただき「徳山の盆踊」のヒーヤイ踊や鹿ん舞との共演・交流の機会をお与え下さった先生の御心に感謝せずにはおられません。あの日、あの時、徳山駅頭でお迎えした感動、交流会、共演、民族の壁を越えての語らいなどなど、先生の明るい笑みをたたえた豊かな美しい表情、温い心、舞踊家としての、人間としての、民族舞踊家としての情熱を、ひしひしと今にして心に深く刻みこまれています。時に当時のアルバムをひもとき感動にひたっております。

阿国と阿国歌舞伎をこよなく愛された先生、その原型を残しているというヒーヤイ踊の「神すずしめ」「桜花」「ぼたん」など愛して下さった先生、焼畑文化の象徴であるといわれる「唐人舞」に深い関心をお寄せ下さった先生、本当にありがとうございました。私達は今後とも先生の御心を大事にしてこの保存伝承に一層努力したいと存じます。雲南から来日された趙紹敏団長さんは、徳山を去るに当たって、次の詩を贈って下さいました。

一衣帯水 天涯毗鄰 中日友誼 萬古長青

と、先生の志と同じであり民族舞踊は国境を越え、民族の壁を越えて、心は一つであり平和を、友好親善を、民俗文化の振興を願うものであります。先生の偉大なるご功績と願いはきっと次の世代に受けつがれ美しく花咲き、実を結ぶことでしょう。

先生とお別れした徳山でSLに乗られてお帰りになったあの日、あの時、感激にむせび手を取りあってのお別れでした。永遠の別れになろうとは、残念でなりません。再会の日を約してお別れしたのに……。

先生、永久に安らげくあれ、美しくあれ、民族舞踊文化への先生の情熱は今も生きております。

黛先生の一週忌に向けて

中村 光枝（旧姓・武田）

先生と父が従兄弟という関係で私は小学生の頃踊りを教えていただきました。赤坂はまだビルもまばらで、都電が走っていました。お稽古に伺うとまず、先生のお母様の所へ行ってご挨拶をするのが習わしでした。お稽古



1995年1月7日

新春の宴 遠山文化庁長官と黛 節子

場には鏡がたくさんあり、床がピカピカに磨かれていました。そのお稽古場に先生が入ってこられるとやはり緊張したものでした。踊りに関しては子供にもとても厳しく、私は背すじがのびていないと、何度か背中に棒を入れられ練習したことがあります。指の先からつま先まで、神経の行き届いた教え方だったと思います。ご自分の踊りに対しては、さらに厳しく創作や研究に邁進されていたようにお見受けしました。踊り以外ではお料理が大好きで、変わったお料理をいろいろご存じだったように記憶しています。また、ネコもお好きでご自宅で何匹もシャムネコを飼ってかわいがっておいででした。

私は受験などのために踊りをやめてしまいましたが、先生は外国との交流など、新しい道をどんどん切り開かれ、一生を踊りにかけられたことは羨望と尊敬の念にたえません。

まだまだやりたいことがおありだったと思うと、亡くなられたことはとても残念です。天国でお母様に見守られながらずっと踊り続けてほしいと思います。

故 黛 節子さんへの弔電

沖縄県八重山郡竹富町西表

前民俗芸能保存会 会長 那根 武

故 黛節子さんの突然の悲報に接し哀悼の意を表します。

在りし日の黛さんは全力を民族舞踊に尽力なされ日本舞踊の発展を図られ中国雲南省少数民族舞踊、韓国舞踊等の交流公演につくされ、日本最南端の西表島の節祭りにも御参列なされて取材された。

平成三年勲四等瑞宝章叙勲に輝いたことを那根ファミリー一同は誇りに思っています。

安らかに日本民族舞踊の発展をお守りください。謹んで御冥福をお祈りします。

忘れもしません

西崎流家元二代目 西崎 緑

昭和27年「赤いローソクと人魚」これが日本舞踊なの……。

衣装、音楽、動き、何と不思議な世界。終演後暫く席を立つことが出来なかった感動は、私の脳裏に強烈な印象として焼き付いております。そして“そう日本舞踊にもこんな素晴らしい道があるのだ。”と

私の創舞を志した第一歩は、始めて見た帝劇の舞台からでした。それからというもの、先生の舞台は必ず拝見させていただき、いつも、私の舞踊への情熱を掻き立てて下さいました。特に民族舞踊に至っては、私の想像を絶するものが多々ございました。そんな憧れの先生から「一緒にお仕事しない」と言うお誘いを受けた時の驚き、そしてお目に掛かり、先生の舞踊に対する姿勢、情熱をじかに感じ、すっかり先生の“とりこ”になってしまいました。

「腰が高い」「音の取り方が駄目」「違うのよ。その体の使い方、心がないのよ。」厳しいお稽古でした。でも踊り手としての血が騒ぎました。心楽しい時間でした。そして今日迄創作に命をかけ情熱を持ち続けてこられたのも、先生との出会いのお蔭です。本当に有難うございました。それにしても余りに呆気ないお別れでございました。未だ未だ踊り続けたかったでしょうに……。しかしながら先生の業績は確実に光り輝き、その精神は私達後輩がしっかり受け継ぎ、感動する舞台作品をこれからも創造してまいります。見守っていて下さい。

先生のお声がもう一度聞きたい。

合掌

黛 節子先生をお偲びして

国立劇場 芸能部長 西角井 正大

昨秋の黛節子先生のご訃報はまことに思いも掛けないことだった。

近年は毎年のように中国や、時にフランスなど海外にお出掛けなさっていたらしいのです。研究と実習と交流と公演などのためです。いつもお人柄そのままに真摯に取り組まれ、中国からはすぐれた実演家も呼ばれ私どもにもうれしいお裾分けを下さっていました。こんな風にいつも先生は生気溢れにお見受けしていたからまだまだお歳からいっても信じ切れないものがあっても当り前ではないのでしょうか。

日本舞踊家の多くは古典オンリーの傾向が強いと思います。幼いころからキレイキレイな舞台姿に憧れて…成人してもその精神構造のままの人も結構見掛けます。善し悪しは別としてそういう人の芸は私にはどこかものたりなくて芸術的共感に欠けることがしばしばです。しかし、黛先生は舞踊と名のつく芸能の全てに興味をお持ちでした。なにかずく民俗芸能に興味をお寄せだったのは、舞踊の原点を探り人間の本性に迫ろうとのお考えがあったのこととされます。日本国内も本土だけでなく沖縄に大変な関心をお寄せでした。沖縄には失われた原日本の心と形があります。

それから中国の雲南に心をお寄せでした。やはり芸能のルーツとしてのアイデンティティをお見詰めだったのではないのでしょうか。七草に赤米をお振る舞いくださったのもそんなお気持ちの表れでしょう。

私は初め父の関係で親しくしていただいたのではないかと思います。先生の公演にはだいぶ古くからお招きに与かりました。でも一番懐かしい出来事は先生が、今は亡き沖縄の名女形親泊興照（おやどまりこうしょう）師に沖縄舞踊の白眉『花風（はなふう）』を習われていた折りご一緒させていただいたことです。もう27・8年も前のことのように思います。どこでしたか覚えていないのは残念ですが、人様があまりご存じないことかも知れません。親泊先生が生きておられれば今年ちょうど百歳になられます。あるいは今ごろは天国でお二人で男女打組スタイルの『加那よう天川（かなようあまかわ）』を楽しく踊っておられるかもしれません。心からご冥福をお祈り申し上げる次第です。

劇団俳優座 女優 野中 マリ子

黛節子。お姉さま。節ちゃん。いいえ私にはもう一つの名前が……藤間節子。私がまだ小学生の頃、日本橋倶楽部で貴女が“かさね”の与右衛門を踊った時、幕が降り、まだ客電のつかない暗い客席はシーンと水を打った様な——そして突然嵐の様な拍手が鳴りひびきました。何時までも何時までも鳴り止まない拍手が今も私の耳にひびいています。いいえあの感動と与右衛門の姿が私の目に耳に消える事なく残っています。一つの芸が上手という事は、確かなものというものは、こんなにも人を感動させる——という事を、体中で知らされた初めての事でした。今私は女優となって舞台に立つ身です。数十年私にとって貴女はその意味で私の師でした。とてつもなく大きい、そんな節ちゃんと赤坂の空間でお仕事を御一緒する様になるなんて……始めておさそいを受けてアイヌの物語の語り手と、私にとっては初めてのトークが後の私の“一人芝居”や人様の前でおしゃべりが出来るキッカケになった様に思います。そして楽しかった七夕様の会で御一緒させて頂きました。時々お電話で話したり、バッタリ出会ったり、その度に貴女の明るいお顔やはずんだ話し声が私の心にやきついてナゼナゼもっと節ちゃんらしいバイタリティーで生きて踊って下さらなかったの——と悲しくなります。まだまだ演りたい事が沢山あった筈、そして“又ね”と何度も言っておきながら……。

今はお母様と一日中踊りの話をしているのでしょうか。満開の笑顔で——。

イザイホーの夜

日本写真家協会名誉会員

(社)全日本郷土芸能会理事長

(株)芳賀ライブラリー代表取締役 芳賀 日出男

昭和53年（1978）は^{うま}午年であった。この年の12月14日から沖縄県の久高島でイザイホーの祭りがおこなわれた。

演出家の原浩一先生と私たち夫婦は、当麻一郎氏のお世話で、島に民宿することになる。

訪ねてみれば、そこは民家の網小屋、中世の歌心風に語れば^{とまや}苦屋である。寝袋持参の意味がよくわかる。なにしろ200軒ほどの小島に600人以上の調査団や取材班が押しかけてきているのだから、寝泊りできるだけでも有難い。

小屋のうす暗い奥の方をうかがうと先客がいた。目のパッチリした黛節子さんだった。これから5日間をこの



イザイホーの夜の大宴会 左端が黛 節子 1976年
写真提供 芳賀日出男

の小屋でどこ寝の共同生活することになるのだ。

食費は自弁ということで、食堂兼売店のテントで弁当を買う。それが朝、昼、夕の3食とも全く同じ真赤なソーセージ弁当で、6食も続くと悲しく、つらくなってきた。

イザイホー3日目の「朱つけ遊び」が無事に終わった日の午後は予定がない。

黛さんが大鍋を借りてこられ、今夜は大宴会をしようという。豚肉と味噌は雑貨屋で買った。野菜は畑に買出しに行くと、持主が祭りの期間中は体がケガレるので農作業は禁止だが、欲しければ勝手に大根でも人参でも抜いて持って行ってくれ、という。これで材料はみんなそろった。庭にカマドもこしらえた。浜辺の流木を薪にして煮はじめる。

黛さんはお料理の味付けが上手で、トン汁はとてもおいしくできあがった。わが苦屋からは久高島の夕べの風によっていい匂いが四方八方に流れていく。それで本田安次、後藤淑先生はじめ、東京で親しい民俗芸能関係の方々を御招待すると11人にもなった。

お代りは何杯もできる。島の泡盛も充分、琉球大学の大城先生が三味線をひき、島唄がわれらの心をゆさぶる。人生の幸福とは、こんな一夜のことをいうのであろうか。

黛さんは三味線のメロディにのって、坐ったまま腰を浮かせて、琉球舞踊をはじめられた。そして最後に「夕神遊び」で聞いたばかりのナンチュたちの掛け声「エーファイ、エーファイ」を叫んだ。その気魄に、私は一瞬黛さんの才能の煌めきを感じた。

12年後の平成2年午年のイザイホーは実現しなかった。今や最後になったイザイホーの夜の黛節子さんも星となられてしまった。思い出は深い。

舞踊の化身

能の主演者 橋岡 久馬 合掌

あ、なつかしき黛先生

昭和十七年初冬、溜池にありし日本自動車株式會社、故、小川菊造社長がお引合せにて、赤坂の拙宅に見えられしが初對面なり。

節子「能の舟辨慶を、私なりに振付けしてみたいので、協力して下さいれば嬉しい。」との要請を受く。爾來星霜五十四年、永く芳誼にあづかれり、黛師匠は戦時中、兵燹を避けて、相州、湯河原温泉に疎開されたり。簾簾を敷きたる座敷に、亡父橋岡久太郎共々招かれ、青豆のご飯にて、もてなされたり。母堂「節子は」と目を細めて、慈しまれし聲音、今も耳朶に響くあり。

竜宮に遊ぶ豊玉媛もかくや、故師が立姿は、右手に把れる扇の尖端迄、血が通ひ居り。

四肢は水を得たる魚のごとく、自由なり。夫れ舞踊の化身と謂ひつべし。今、門弟高足のかたがた打つどひ、後繼揺ぎ無し。又、財團の方は、経験深き大野 晃翁が擔はれ、殊に理事長には斯界至上の、犬丸 直日本藝術院院長あるありで、巖もかくやと安らけく、黛先生、彩雲の上より、微笑みて嚮はす覽と、しか云ふ。

供養・黛節子の内景

作家 秦恒平

黛さんが亡くなられて、やがて一年になる。無常迅速——折りしも、秋。あの世の季節も秋だろうか。月見の酒に興を發して、一人舞い、いや黛節子としてはあくまで踊りを、工夫しておられるかも知れない。いやいや賑やかに、またも浄土に舞踊の団体を設立し、歌舞の菩薩たちを仕切っておられるのではないか。

「いま、月を見えますの」などと、月見にはやや陽気すぎる元気な声で、電話をもらったことがある。活気という二字を、いちばん適切に身に抱いた人であった。励まされ鼓舞された人が、さぞ多かったのではないか。思いの芯のところには、だが「静かさ」「清さ」に深い憧れをもち、いわば「あはれ」を人に秘めていた人のように、月も朧ろに記憶している。舞踊のことは、わたくしには、よく分からない。趣向にかけた工夫が、やや自然な味わいよりは濃かった気もしているが、ただ趣味的な舞踊を技能としてのみ表現するのではなく、「民族舞踊」という建前に借りながら、伝統と現代とを串刺しに「批評」したい本音を守っていたのが、黛節子の内景であったろうか。

イベントをいわば「お祭り」に仕上げる才能の持ち主だったから、黛さんは、少なくとも外向きには陽気な芸術家であった。陰気なことは似合わなかった。もとより陰陽は表裏していて、彼女とても陽気というものの表現が、いかにそれのみでは難しいかを痛感していただろう。わたくしのような陰気な男に、思い余ると酒の勢いで電話などしてきたのも、黛節子なりの自己統御がはかられていたかと、そんな気がしないでもない。才能とは、そういう細心を人知れず抱いて涵養するしかない難物なのであろう。人皆に、いくらか思いの外の黛さんが、ひとり生き、ひとり逝ってしまったのだと、一周忌を機に心静かに思い当たってみるのも、よき供養であらうと思う。

先生は私に良く「あなたとわたしは親戚なのよ」といわれました。それもそのはず本名はわたしも武田、家紋は四つ菱、なのです。昔から家紋が同じだと「親族」と聞いております。

日本民俗芸能協会の席でお目にかかりましたのがはじまりで、黛民族舞踊文化財団に参加し2回も雲南省の各地を巡業いたしました。

その間の思い出はつきませんが、ある時赤い草履をはいて踊るおどりがありました。宿からもって出るのを忘れ、一緒におどる皆さんは私にあわせてぬいで踊ってくださいました。それをしっかり見ていらした先生にこっぴどくおこられてしまいました。又ある時は「あれがほしい」と言えばと他国なのにその品物が手にはいるように便宜をはかってくださり、とび上ってよるこんだ事もあります。

実の姉のようにお慕いしていた私は「がんばるのよ」という先生のお声が耳の底にこびりついております。

私の血となり肉となった思い出を胸に秘め頑張ってゆきたいと思います。

21世紀の国際化時代に向い、黛先生が築かれた民族舞踊交流の場が益々発展されることを心からお祈りして止みません。

黛 節子さんの思い出

芝浦工業大学名誉教授 早川 俊雄
(本名 宮地 杭一)

昭和27年、黛さんは小川未明作「赤いローソクと人魚」という素晴らしい作品を帝劇で上演した。夢の多いほのぼのとする楽しい舞台であった。見事にその年の芸術祭で文部大臣奨励賞を受賞された。私とのお付合もその頃からである。

昭和28年2月に我国で初めてテレビ放送が開始された。当時、私はNHKに在籍し技術研究所から内幸町にある放送会館で、テレビスタジオの技術責任者としてスタジオ関係を取りまとめていた。確かその夏の少し前のことだと記憶しているが、黛さんと大変親しい舞台照明家故松崎國雄さんと御一緒に、何かのパーティの帰りに



赤いローソクと人魚

黛 節子

我家に寄って頂いた。そして自作の14インチテレビで放送を見て頂いたことがある。勿論今と違って黒白である。黛さんは初めてテレビを御覧になったと喜んで下さった。

昭和31年、以前の藤間節子さんから黛節子と改名、民族舞踊の道にひたすら突進され、黛節子舞踊団を結成、国内はもとより国際的にも、パリ、ローマ、米国、サウジアラビアなどに日本代表として出席、素晴らしい大活躍もされたのである。

その後、黛民族舞踊文化財団を設立、理事長に就任。更に中国、韓国などとも活発に交流を行った。

平成2年には国際民族芸術組織(I O V)の招聘を受け、ウィーンの総会に出席。そして理事、評議員、文化助成委員長などに要請され就任した。

日本の民族舞踊家として、これだけ世界中に活躍、貢献された方は非常に少ない。日本での多くの公演のほか、私にとっては楽しい思い出も多い。毎年一月七日、黛アートサロンで小舞踊会を開催、黛さんをはじめお弟子さんたちの踊りを拝見し、七草粥を御馳走になる、今では懐しいことの一つである。

最後にお会いしたのは、先に述べた松崎國雄さんの告別式の時である。まだまだお元気でいて下さるものと信じていたのに、誠に残念である。故人の遺志を継ぎ財団の今後とも民族舞踊の発展のため、御活動されることを期待している。

節子さんに会った頃

日本舞踊家 林 一枝

銀座三十間堀のお師匠さんのお宅で初めて節子さんに会った時節子さんはまだはたち、とてもきれいで、きか
ん気で可愛く丁度夏日に凜と咲いた真っ赤なカンナの花のようでした。

私たちは直ぐ仲よくなって、一人っ子の節子さんは後に私を姉と呼ぶようになりました。

師匠の稽古はとてもきびしく、朝早くからの毎日稽古でした。努力次第ではいくらでも仕込んで頂くことが出
来たので、私たちは一筋に稽古に打ち込みました。また時には二人で新しく創る舞踊について、赤い鳥の童謡、
童話、アンデルセン、イソップ等々、夢中で語り合いました。

昭和17年、私は結婚して夫の任地中国に移ることになり、止むなく、節子さんには、私の分まで踊って下さい、
と云い残して別れました。

終戦後、偶然出逢った広田龍太郎先生から、「節子が貴女を探している」と聞いたことがきっかけで、思いが
けない再会となりました。

この時、驚いたことに節子さんの母上は失明されておられ、一方、私には夫をソ連に残し連れて帰った幼い子
供がいました。そこで母上の発案で二人はお互いに力を尽して協力しあう生活を始めることになりました。今の
黛ビルの所にあった平屋を或る大手の会社の寮として使い、軽い食事や懐石料理など、河岸の買い出しからデザー
トまで総て、二人だけで分担しやり通したものです。

また、踊りの方も各方面からの依頼を受けて二人で松島音頭、豊年唄、田植唄など20分位のプログラムを編
集し、クラブやホテルで踊りました。伴奏は護国寺の盲学校の先生であった箏曲の斎藤氏の生演奏で、当時とし
てはお客さまに大変喜ばれ、とても好評でした。

しかし、このように折角順調に滑り出した仕事も、私の一方的な事情によって休止符をうつことになってしま
いました。

それ以後、二人は同じ舞踊ではありますが節子さんは民族舞踊、私は古典にこだわって、二人の道は自ずから
別れることになりました。

それから幾歳の月日が流れ、あの日病室で静かに眠る節子さんの手をとって「節っちゃん、節っちゃん」と
何度も何度も呼びましたが、深い眠りの底に沈んでいるようで応えがありませんでした。でもその遠くなった意
識の中で確かに私の声を聞き分け、受止めながら只応えられなかったことが私にはよく判り胸がいっぱいになり
ました。

それから間もなくご他界と承り本当にがっかりしました。

私にとってもとても嬉しかった「赤いろうそくと人魚」（芸術祭文部大臣奨励賞）の受賞のことなど、話した
いことが沢山あったのに、長い時間がありながらと思うと悔やまれてなりません。

どうぞ天国でも節子さんの踊を踊ってください。節子さん さようなら

新舞踊運動から民族舞踊まで

評論家 平野 英俊

季刊「民俗芸能」（第34号）に書いた「黛アートサロンの夕べ」（昭和43年8月28日）が私のはじめての
舞踊会評で、すぐ黛節子先生からお電話をいただいた。評に対する感想や意見など述べられたが、そのときの驚
きやら恐れやらは、ついこの間の出来事のように思い出される。

腰を据えてお話をした事はないが、取材で二、三度お話を伺った印象では、戦争の激動期を生き抜いた人に共
通する、情熱あふれる人柄で、いつも圧倒された。

前名、藤間節子の初リサイルは昭和24年であるが、その前、昭和22年には初代藤蔭静枝、初代五條珠美、
初代西崎緑、二代花柳寿美（現、宗岳）、二代藤蔭静枝と「創作舞踊家グループ」を組織したというから、当時
の新舞踊運動の一翼を担っていたという訳で、先生の舞踊史の出発にとって煌いた事実であった。

私が見た先生の作品の中で、一番印象深いのは、「桜樹散華」（昭和50年11月11日、日生劇場）で、し
のらは踊りを題材にして、出雲のお国のかぶき踊り時代の舞踊美を結集し、現代に蘇らせた作品で、歌舞伎の男性
芸能の美から解放して、日本の女性美を賛美する舞踊作品であった。再演で再構成して真価を問うたが、結果は
否と出た。先生の作品意図が理解されなかったという点で、今でも残念に思えてならない。

新舞踊運動、民俗舞踊から民族舞踊へ、終着点は財団であった。白拍子、米、七夕……等の講座への取組は、
先生の旺盛な研究心のたまもので、私の範とする姿勢であった。

もう一つ、忘れられないものに、1月7日の「七草の宴」がある。自ずから作った七草とお粥が参加者にふる
まわれた。健康祈願のこの催しはなにによりのごちそうであった。私事ながらその日は私の誕生日、先生のお粥を
盛る笑顔とともに、大事にしたい一日であった。

思い出すのは黛ビルでの公演を数回拝見したこと、それと例の七草粥の御馳走にあずかったことなどで、私は、言わばずばらな隠れファンにすぎない。しかし、奈良の博物館にいた頃、飛鳥に関して御質問の書状を頂いたことがあり、内容は忘れたが、思い立ったらすぐ実行される果敢さに敬服した記憶がある。その御性格は、大陸各地の民族芸能を現地調査したり、東京に呼んで世に紹介するという先駆的な業績にもあらわれている。これは国に民族舞踊研究所のようなものがあれば、当然そこがやるべき事業だが、その容易ならざることを、独力で実践躬行されたのである。芸術祭に参加された頃の黛さんも輝いておられたが、後年のお仕事はそれ以上に輝かしいものであったと、声を大にして、また感謝をこめて、言いたい。

毛越寺貫主 藤里 慈亮

(財)黛民族舞踊文化財団におかれましては、前理事長故黛節子先生のご遺志を継承され、日本民族舞踊興隆発展の新事業をご準備なされていらっしゃることは、大変意義があり、皆様方のご尽力にご期待申し上げる所でございます。

黛先生に初めてお会いしたのは今から十数年前のことで、日本民俗芸能学の権威、早稲田大学名誉教授で、文化功労者を受賞された本田安次先生のご紹介により、お弟子様方ご同道でお尋ね下され、毛越寺に伝わる延年の舞を勉強させて頂きたいというご要望でございました。早速若女禰宜舞など一、二番を舞ってお見せしましたところ、すぐさまその所作をまねられ、その勘の鋭さには驚かされたものでした。

延年の舞は、正月二十日の毛越寺常行堂例祭に、慈覚大師伝来の常行三昧供修法の法会のあと法楽として奉納される舞のことで、八百年以前から毛越寺一山の僧侶及び子弟によって、謡い舞い継がれてきた寺院の芸能です。吾妻鏡という鎌倉時代の記録には、舞は数十番あり、更には舞楽は舞人三十人楽人三十人あったと記されており、田楽僧や遊僧と呼ばれる諸芸に堪能な人々によって夫れ夫れ持ち前の芸が披露されたと伝えられています。延年は、仏を讃え寺を誉め参詣者の千秋万歳を寿ぐもので、楽舞をもってする一種の祈祷であったともいわれております。現在舞は十二番残っていますが、本田先生には昭和七年頃からご研究をいただき、全国にご紹介下され、その保存継承に力強いご支援を賜りました事は、若 女



黛 節子

写真撮影 清水三郎

大変感謝に堪えない所でございます。黛先生は、本田先生のご研究に深い関心を寄せられ、当時の延年の舞を勉強なされ、創作活動にもご熱心で、そのご努力に深く敬意を表します。

日本には民俗芸能が各地に沢山あり、地域毎に夫れ夫れ特徴があり、しかも由緒をもったすばらしい芸能が多く、その中から取材された所作には、日本文化の神髄があります。

黛先生のご活躍は国内だけでなく海外にも及び、そのご縁で昨年の正月には中国の先生を莉香様がご案内下され、酷寒もお厭いなく深夜まで二十日夜祭の法要と延年の舞をご覧になられ、その後深く感動されたご様子のお手紙をいただきました。誠に有り難いことと存じます。

黛先生は、日本文化の宣揚に大きな足跡を残された貴重なお方であったと思います。もっとご長命をいただき、ご活躍いただきたかったと残念に思います。

心から故先生のご冥福をお祈りし、今後皆様方のご発展を祈念いたします。

黛 節子氏を偲んで

現代舞踊家 芙二 三枝子

「雲南へ、ライスロードの旅はいかがですか、是非一緒に行きましょう」と、お推めを頂きながら、つい実現をしないままであったことは、今思えば誠に残念です。

舞踊道の先輩である黛節子氏が、民族のルーツを訪ね、民族舞踊の流れを探索し、その成果の発表を、ご生涯を貫いて実行なさったことは、多くの方々の知る所ですが、その情熱に改めて尊敬の念を深くしております。お元気でもっともっと、長生きをして頂きたかったと、口惜しく存じます。

随分以前のことで、外国からきたバレエ団の舞台を、偶然隣席に座って見た時、私がフト感想をもらしたことが、黛節子氏のお心に響いたとかで、それから親しく言葉をかけて頂くようになり、時には長い時間話し合ったり、同志として電話で励ましを頂いたりしました。また、1980年の夏、黛民族舞踊文化財団の赤坂のサロンを拝借したことがありました。それは、私の門下生の馬場ひかりが、文化庁の海外研修員に選出され、ニューヨークのジュリアード大学に入学することになり、急拠「励まして送り出す会」を催すためでした。あの広いサロンの中程に緑の葉の美しい、背の高いポトスを二鉢、上手下手に置いて、踊りのエリアをつくり、見やすい所に椅子を置いて、モダン・ダンスを見て頂き、そのあと懇親会を続けるという会でしたが、お陰様で心に残る集いをさせて頂きました。

そのポトスの鉢を黛氏に差上げ、置いて帰りました所、数年たった後「杉並の家の方でとても見事に成長したのよ。お返ししましょうか」と、言って下さいました。植物をいとおしんで下さった黛節子氏のお心の一端を知り、かえって恐縮に思ったことが、忘れられません。

恒例の正月七草の宴で、巫女のように舞っていたお姿が、目に残っています。できることの限られた私ですが、生きぬかれた黛節子氏を偲んで、踊りの道を歩き、ご厚情にお応えしたいと思っています。

黛 節子様の思い出

イースタン興業(株) 取締役社長 藤本 佳子

私が黛節子様のご訃報を知りましたのは大正会の例会の席でございましたので、一瞬耳を疑ってしまいました。遡って考えて見ますと、海外出張中の事でしたようでお参りにも伺えず、今でも大変申し訳なく存じております。

でもその後、黛民族舞踊文化財団はご意志を継いで生き続けられるとのこと、何よりのご供養と感動いたしました。今、目を閉じて節子様との出会いの頃に思いを馳せますと何故か興奮して参ります。深網笠の佐渡おけさや相川音頭、コキリコの何とも愛らしく優雅なリズムと動き、鹿舞のエネルギッシュな躍動美等、廻り燈籠のように浮かんで参ります。

日本の遺産とも云える伝統的な民俗舞踊の原点を失わずに新しい感覚でアレンジする事は至難の技と思いますが、見事に実現なさった方だと思えます。

昭和31年、妹の結婚式の時にお願ひして、ご祝儀用に舞って頂いたことがございました。席がいささかマンネリ調になった頃、華麗なリズムに乗って客席の間を縫うようにして舞台まで……そのあでやかで独特なパワーに圧倒され、会場の雰囲気が一気に盛り上がったのを覚えております。私も長年地唄舞いの道に励んでおり、同好の友でしたから、かつての或日、リカルドサントスのレコードを聞き乍ら思わず一緒にリズムに乗ってしまったあの熱っぽい^{ひととき}一刻など忘れられない思いででございます。

私は昭和44年に夫を亡くしましてからその遺業を継いで会社経営にたずさわるようになり、日々忙しくなった為、節子様にお目に掛かる機会がへってしまいました。けれど、どこかで同好の友としての接点を持ち続けてきたような気がしております。

一生を舞踊で貫いた節子様、天国でも舞い続けていらっしゃるような気がしてなりません。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

中国との舞踊交流と黛さん

(株)林友 社長 穂苅 甲子男

黛節子さんと知りあいになれたのは、たしか大正会の席上であったと思いますが、私が松本で日中友好協会会長として、中国の昆明市を訪れて少数民族の民芸に興味をもちはじめたことの話から発展して、民族舞踊についての黛さんの詳しいお話を聞くことができ、その後雲南省の民族舞踊家の皆さんとの交流へとお導きをいただくようになりました。

最初に雲南省の民族舞踊家の皆さんをお連れして松本へお出掛けいただき、松本日中友好協会と地元の菊水流という舞踊団体でお迎えいたし、林友ホールで民族舞踊を公演いただいた7年前のことがいま懐かしく思い出されます。

翌日は中国の皆さんとともに上高地へご案内いたし、ゆっくりとおくつろぎいただいておよろこびいただいたことなどが、その後お会いするたびの話の種でした。

二度目にお連れいただいた雲南省の舞踊家の皆さんとの晚餐会を交えての舞踊交流も楽しい一夜でした。黛先生も日本の民族舞踊をご披露下さいまして、興が深まるにつれて私ども日中友好協会会員まで壇上に上り、見よう見真似で踊りまくったことなどがなつかしく楽しい思い出となりました。

翌日は安曇野をご案内しましたが、ちょうど連休にかかり道路が混んでしまい、帰りの松本駅の乗車時間ぎりぎりになって、列車を1分間遅らせたことなど、黛先生には一生頭が上らない大失敗の思い出でした。

「穂苅さん、カナダへ行きたいわ」と度々仰言っておられました。私がカナダの写真をカレンダーにして毎年お届けしていたためか格別の想いがあられたらしく、そのうちに、そのうちにとしているうちに遂にご案内が出来なくなってしまったことが深く悔まれます。

黛節子さん、永久に安らかに。

雲南省少数民族舞踊への熱き想い

文化庁主任文化財調査官 星野 紘

昨年四月機関紙の編集を手伝ってほしいといわれ荻窪の黛節子先生のお宅を訪れた。毎年正月、七草粥で新年会を催しておられ、その折我が家の庭に植えた七草ですとにこやかに語っておられた。実に立派なお庭で、家二軒分の敷地の中の広い空間に様々な草花が所狭しと葉を繁らせ、花をほころばせていた。コバルト色の葉の花様の植物の花が真っ盛りだった。咳き込む病いがなかなか治らないと顔をくもらせながらも、これはチェコからもらったものですとか、世界各地からの植物を紹介してくれた。桜の園ならぬ花園の中の黛先生であった。雲南省の少数民族の舞踊の本を出版されたいこと、東巴というナシ族の宗教職能者を是非日本へよんで、イベントとしてではなく、その本物の神との交流ぶりを紹介する事業をやってみたいことを語っておられた。黛先生の雲南省の少数民族舞踊の本物の姿に対する熱き想いを感じさせてくれる機会であった。その願いは必ず実現されてゆくものと信じています。

御冥福をお祈りいたします。

松崎照明(株) 社長 松崎 邦昭

「黛アートサロン」は照明の道を志す松崎國雄の門下生たちには他で培うことの出来ない、貴重な教えを受ける空間でした。もっともっと踊り続けていただきたかった。

“裏方ってどうあるべきなんだろう”この基本的な問いに答えが出ない門下生が数多くおります。黛先生に身近に接し、作品創りに参加しながらそれを考えさせる時間がもっともっと欲しかった。亡き父が「松崎先生の光でないと踊れない」とまで言われた事をこれからの若い人達に感じてもらいたかった。

私は、先生が踊りを心から愛し、真摯に作品創りに取組む姿勢に大きな影響を受け、先生のお人柄から教えられることがたくさんありました。同じ想いを持つ者が一人でも多く育ち、サロンでの仕事の喜びをわかちあいたかった。私共にとってはあまりにも突然のお別れでした。残念でなりません。

しかし松崎門下一同には、先生の踊りに命をかけた情熱が不滅のものとして語り継がれるものと信じております。

偉大な業績が残され、先生のご遺志を継がれる黛民族舞踊文化財団の今後の発展を願いつつ、黛先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

黛さんとの初対面は1961年か2年だったと思う。会いたいとの電話を頂いて、新橋第一ホテルのロビーで待ち合わせて、話をうかがった。延々3時間くらい、黛さんは、今まで学んできた舞踊に対する疑問や悩み、そして自分の踊りを見つめ直すためにも民俗芸能を勉強したい。そのためには、何を、どこで、どんな方法で学べきか……などを、切々と語られた。当時まだ青二才の私などに、謙虚に、真摯に接してくださるその態度に感じ入って、それから、赤坂の稽古場を訪ねたり、あそこへ行ったらとか、この人に会ったらなどとアドバイスするようになった。

ただ、振り返って残念なのは、その後のお付き合いで、何故かすれ違いが多く、フィールドワークを一緒にと言いついても、なかなか実現せず、78年が最後だった沖縄久高島のイザイホーの祭りも、私が見学を誘いながら都合で行けず、黛さんたちだけが見た。また、さまざまな会合も、あちらの出るときはこちらはいず、こちらの出たときはあちらはいずで、意見の交換はもっぱら電話ですませた。また、黛さん主催のお催しも、財団の理事会も、不思議に他用に妨げられて出席出来ず、「三隅は薄情者」のレッテルを張られたものと思う。慚愧に堪えない。

それと、すれ違っての心残りは、68年頃か、当時私はTBSの故丸山忍・沢田春夫氏などとミュージカルを創ったりして、黛さんからも民俗的な舞踊作品をと頼まれて、「雪に生きる」と言う台本を纏めた。と言っても、完成まで日がかかって、その上会う機会も例のすれ違いの連続だったから、何となくお流れになって、今もその台本は手元にある。もし上演していれば……との悔いはあるが、それより、以後、黛さんが情熱を賭けた沖縄・神楽・巫女・中国少数民族の芸能の研究に十分な協力をなし得なかったことを、深く墓前にお詫びしたい。

黛 節子さんの思い出

日本大学講師 宮尾 與男

黛節子さんとは四十年近くにわたるお付き合いとなる。とはいっても父、宮尾しげをにくつついて子供時分から接しただけである。父とのかかわりは相当ふるかったらしいが、その経緯はわからない。黛さんが玉川大学非常勤講師になった契機は父の紹介からであったことは知られていないだろう。私が玉川学園中学部、高等部に在学していた関係から、玉川学園が海外舞踊公演で日本の民俗芸能を紹介する際、担当の岡田純子さんから父に相談があり、黛さんを紹介したのが始まりと記憶している。

ところで平成六年二月二十六日の朝早くに、突然、黛さんから電話をいただいた。「あなたがいることを忘れていたわ。赤坂や杉並の家、軽井沢の土地などを有効に使って財団に協力して」と長々の電話。そして「午後からの会を一緒にみない、今日逢いたいから」の誘いに早速逢うことになった。帰りに食事をしながら「あなたもお父様と同じように江戸っ子ね。私も江戸っ子だから、思ったことをすぐに実行しないと気が済まないの」といわれ「考えましょう」と約束した。その時に食べたものはカツカレー。「半分食べて」と黛さんご自分のスプーンで分けて下さる。分量が多かったのは確かであるが、私が食べてくれることに対し「江戸っ子はうれしいわ」と、とてもうれしい顔でいわれたのを思い出す。後にも先にも、これが黛さんとのたった一回の食事であった。その日のうちに「黛民族舞踊文化財団事業計画案」を立てて翌二十七日に電話をした。「うれしいわ、やはり江戸っ子ね。いい計画案ね。内容についてはつぎのときに見せてね」といわれながら、いつでも渡せると思っていたのが誤算であった。とうとうその機会がないままであった。この場を借りて「黛さん、本当に遅くなりましたが具体的な内容を見て下さい」。

[I] アジア民族舞踊研究所（仮称）の設立。（別案「アジア民族舞踊研究センター」）。アジア各国の民族舞踊の調査・研究機関としてのアジア民族舞踊研究所を設立。[内容] 研究プロジェクトによるアジア民族舞踊の総合的研究。アジア民族舞踊の総合的研究調査報告書の出版。研究所編集による『アジア民族舞踊事典』の出版。研究者招聘による「アジア民族舞踊シンポジウム」開催。各国の民族舞踊研究機関と交流。「アジア民族舞踊」公演の企画。研究会・講演会の開催。[II] 日本民族舞踊団の結成。春夏秋冬にわたる日本の農耕（稲作）文化を基盤にした民族舞踊を各地にもとめ「日本の民族舞踊」としてまとめ、それを演じる日本民族舞踊団を結成する。舞踊団は国内・国外で公演。[III] 民族舞踊の研究・創作に対する助成。民族舞踊に携わる個人および団体（グループ）または研究・創作に対する助成（奨励金交付事業）。[IV] 民族舞踊の研究・創作に対する表彰。民族舞踊に携わる個人および団体（グループ）または研究・創作に対する表彰（仮称・黛民族舞踊文化賞）。[V] 民族舞踊の創作と発表。日本の民族舞踊を通して次代に残す民族舞踊を創作し発表していく。[VI] 機関誌『日本民族舞踊研究』（仮称）の発刊。日本の民俗芸能の中の舞踊を研究する機関誌の発行。日本民族舞踊研究所（仮称）を設置し研究所の機関誌とする。[VII] 民族舞踊家の養成。

如何でしょうか。「これはいいわ。これはすぐにやりましょ」といってくださる声が聞こえてきそうである。

日本と中国雲南との架け橋

演劇評論家 森 秀男

黛節子さんがまだ藤間節子を名乗り、若い才能をめざましく開花させた1950年の初め頃だったと思うが、わたしはたまたま『智恵子抄』を見て深く感銘した。『赤いろうそくと人魚』の印象も忘れがたい。

黛さんはやがて流派から独立して、日本の民族舞踊を開拓する道を選んだ。舞踊の熱心な観客にはなれなかったわたしは、それを遠くから窺い知るだけだったが、黛民族舞踊文化財団を設立してからの着実なお仕事には、ひそかな敬意を抱いてきた。

会社勤めから解放されたわたしは、1984年から毎年のように中国への旅を続けることになった。黛さんも同じ頃から中国雲南省の少数民族舞踊の取材、舞踊家との交流に力を注いでいる。86年には雲南省民族舞踊家代表団を日本へ招いたが、わたしはそのときの集まりに出席する機会を得た。黛さんは初対面に近いわたしに気のおけない話しぶりで接してくださったが、代表団の団長で中国舞踏家協会雲南分会常務副主席の劉金吾さんを囲んで打ちとけた懇談は楽しいものだった。

88年6月には、二度にわたって雲南省少数民族舞踊を取材した成果の発表会が草月ホールで催された。わたしは7月に杉村春子さんと昆明^{シーサンパンナ}を訪れることになっていたので、この舞台に格別の感興を持ったが、黛さんは「劉金吾さんに手紙を出しておくから、昆明でぜひ会ってらっしゃい」と熱心にすすめてくださった。劉さんは杉村さんともごく親しい間柄だったので、昆明では案内役を引き受けてくださったが、招宴の席では黛さんとの交流のことも話題にのぼった。わたしは劉さんからことづかった包みと手紙を黛さんに届けたが、黛さんは西双版纳で公演したときの感激を時の経つのも忘れて語りつづけた。

わたしは91年の初めに杉村さんとまた昆明を訪れ、劉さんとも再会し、少数民族の町である大理、麗江へも行った。黛さんも4月に西双版纳への三度目の旅をしている。そのあと日中文化交流協会のパーティーでお会いしたとき、「わたしも大理へはぜひ行きたいのよ」といっておられたのだが……。

黛さんは日本と中国雲南の民族舞踊を結ぶ橋を架けるという大きな仕事を果たされた。その志はこれからも受け継がれていくにちがいない。

黛先生を偲んで

扇屋ジャスコ株式会社 取締役相談役 安田 敬一

黛先生を私に紹介して下さったのは、修養団の常務理事だった菅野辰三郎先生（故人）でありました。私が扇屋百貨店（現・扇屋ジャスコの前身）の社長に就任して間もなくの昭和37年頃のことでした。

その頃、菅野先生のまわりには、これからの日本を明るく元気にしようという純粋な“志”をもった年若い芸術家や、学者、青年団運動のリーダーたちが沢山集まって、いわば応援団のようなかたちで、菅野先生の修養団活動をバックアップしていたのでした。

若き日の黛先生も、そうした芸術家の一人としてはつらつと民族舞踊を披露されていたことを思い出します。その後、何回も私の会社にも見えられ、創業式典や記念行事にもお越しいただいて、あの華麗な踊りを舞っていただきました。

黛民族舞踊文化財団設立に際しては、わざわざお越しいただき財団の理念を熱心にお聞かせいただき本当に感銘をいたしましたことでした。

黛先生は、真の踊りの天才であったと同時に、大変に研究熱心な努力家でもいられました。日本各地を回って、その土地、土地に伝わる民踊をつぶさに研究され、その成果を自らの踊りの中に血肉化し、あの豊かな踊りを創造されました。

更にまた、東南アジアの奥地にまで足を運ばれて、雲南やタイの少数民族の心に触れ、その民族舞踊の紹介に熱心につとめられました。

あのエネルギーな行動力と、民族のルーツにまでさかのぼって踊りの奥義を究めようとされた、ひたむきな探究心には、心から敬服するものがありました。

わが国の古い伝統民踊を、舞台美術として確立され、さらに民族舞踊を通して国際文化交流に尽くされた黛先生の業績は、まことに輝かしいものがあります。わが国を代表する民族舞踊家を失い、あの典雅な踊りを二度と見ることができないのは、本当に淋しいことです。

心より黛先生のご冥福をお祈り申し上げます。

黛 節子さんと沖縄

沖縄県立芸術大学（客員）教授 矢野 輝雄

黛節子さんの昭和30年代の沖縄に取材した創作舞踊は、そのみずみずしい感性が今日も語り草となっている。黛さんの創作舞踊は数多いが、特に沖縄には大きな感心を寄せておられたように思われる。

亡くなられる3年ばかり前、三味線の伝来とその本土における展開を取り上げ、沖縄の三味線から常磐津三味線・津軽三味線など本土の各種の三味線と、その演奏の形を踊りを交えて紹介された。そのとき常磐津を語りたと言っておられたが、まさかと思っているうちに、今の家元常磐津文字太夫さんについて、「蜘蛛の糸」の奥州浄瑠璃の段を習われた。そして当日は、常磐津の語りもののなかでも一際難しい奥州浄瑠璃を立派に語られたのである。黛さんのご父君は常磐津三味線の名手三蔵さんであり、お父さんへの追慕の心をこめての語りと伺ったが、良い親孝行をしたと話しておられたのが深く印象に残っている。

それにつけても、思い立つとすぐ行動に移されるたくましい行動力には驚かされた。沖縄の京太郎（チョンダラー）の芸を勉強したいと思い立つてすぐ那覇にとばれ、台本まで自分で作られるという風で、その意欲と行動力は若いものをしのぐところがあった。「口説囃子（クドッチ・ベシ）」を踊るときもそうで、沖縄でもだんだん踊れる人が少なくなったことをお話ししたところ、ぜひ踊りたいと言っておられたが、早速仲浜靖一さんに相談されたい。突然仲浜さんから電話で内容を聞かれて驚いたのも、昨日のここのように思い出される。口説囃子というのは「上り口説」を踊り、囃子言葉を自分で唱えながら踊る形である。しかも、囃子詞は沖縄方言で早口である。歌詞が、なかなか覚え切れないとこぼしておられたが、公演の当日は壁に歌詞を張り出してはいたが、見事に歌い踊られたのには感心させられた。

沖縄への関心がいつも黛さんの大きな心の柱になっており、その広がりが雲南へと遡る形で、生涯を貫かれたことを改めてかみしめている。心からご冥福を祈りたい。

合掌

黛さんの思い出

演劇評論家 八巻 献吉



ヒエツキ唄

黛 節子

節子菱の花サークルのパンフレットの表紙 1952.6.28.

東横ホールで裏方をしている時、(昭和30年頃はホールだった)初めて黛さんの舞台を見た。日本民謡集のリサイタルであった。ヒエツキ節や八木節や津軽の民謡などであったが、袖で見ていたうちに、踊る黛さんと若い人達の体から、ほとぼしる踊る心の美しさに自然に涙が出てきて感動していた。踊りがあんまり美しかったのだ。最後の曲は八木節だったと思うが、八木節で泣くのはおかしいと思うが泣いたからしかたがない。黛さんが舞台からおりてきた時思わず『いい踊りですね』と言った。黛さんがにっこり笑っていたことは覚えている。それから黛さんの踊りが好きになって、つぎつぎと、見に行った。藤間の名を返して、黛になったばかりの時だった。

長いお付き合いだが、黛さんの赤坂の家にかがって、暗い(という印象がある)部屋で沢山の小道具や衣装のおいてある中で、黛さんの民族舞踊の高説を聞いた記憶がある。その後に黛会館がその地に出来て、それが今日まで続いている。

演目は沖縄、韓国、中国と広がり、黛民族舞踊文化財団に発展してますます広がっていった。

毎年正月の七日には七草粥の馳走があり、嬉しく馳走になりにいったし、その他いろいろの企画の催しに呼ばれたが、私が身体を悪くしてからは、殆ど御逢い出来なかった。

記憶も悪く、こんな思い出しか書けないが、黛さんは芸術家であった。民族芸能が黛さんの手にかかるると芸術になった。この黛さんの力の偉大さは、心に大きく残っている。

黛さんは日本の舞踊から東洋の舞踊と心の中に美しい舞踊を持っていた。そしてすべを自分の手で踊りたかったのだと思う。

黛先生、高原の夏がまた巡ってきました。もくもく入道雲を背にした妙高山の中腹に、ホテルの赤い屋根が今日も光っています。

「あゝあそこに先生がおいでになっている。」そう思いつつ車を走らせた夏の幾たびかをありありと胸に思いおこします。

「東京の舞踊家の先生にお会いしてみない。」と、海の陽子ちゃんに誘われて初めて先生にお会いしたのは7年程前の夏でした。二度目にお会いした時は、何故か訳もなく涙が流れて、遠い昔約束した再会をようやく果たしたような思いがいたしました。不思議です。

妙高での先生は、Tシャツ、巻スカートにズック姿、目をきらきら輝かせた少女のようでした。ラヴェンダー畑では、「ああ、土のあったかいこと」と、地面にべったりすわりこまれたり、竹かごを腰にぶらさげて時折実を口を含みつつ、ブルーベリー摘みをしたり。「お日さまの匂いがするわねえ」と、真赤なトマトを丸かじりした、黒姫のお店には、今年も焼きとうもろこしやなすが並んでいます。とうもろこし畑を渡ってくるみどり色の風、遠く近くかなかな蟬が鳴き交わしていたあの夏のひととき。「あはは、えへへ……。」とお腹の底から笑い興じておられた先生のお姿を忘れません。田舎の町の映画館へ、上杉謙信の「天と地と」の映画も見にゆきましたね。「戦^{いくさ}仕度の赤と黒の入り乱れる様は美しかったわねえ、巫女舞のあれは正しくないのよ。」など、今見てきた映画の内容の深い所に触れたお話をされながら、「ああ、この稲の匂い、うれしい！うれしい！」と歓声をあげられた先生のお声が聞こえてきそうです。

民族舞踊家としての先生のステージでの舞姿をついに一度も拝見できぬままに、先生とお別れしてしまいました。私の心を巡っているのは、ただ、ただ夏の日のやんちゃな喜々とした先生のお姿です。

今日もまた、妙高のお山には、白い雲が湧き、ホテルの赤い屋根が見えかくれしています。あの山ひだを天女になって舞っておられるんですね先生。時々、その天女の衣を頂きに脱ぎすて、また下界でトマトをご一緒にしたいです。

高原の駅を蛇行して小さくなっていく電車の後ろ姿を見送りながら、「先生、またお会いしましょうね。」と手を振った日々。きっとまた、高原へ帰ってこられるような気がしてなりません。

黛先生、空のかなたに、このお手紙が届きますか、お返事待っています。

あんぽんたんの山の洋子より

平成8年8月

お別れになってしまった手紙

株式会社サンクリエイティブパブリシティ勤務 山根 宏一

黛節子理事長と私が最期にお話をしたのは、病状を知らないまま「早くよくなられて元気に退院してきてください」と一方的に呼びかけた手紙です。お亡くなりになった当日か前々日にお手元に届いたと思います。

昨年は恒例の夏公演のご連絡がなかったので、避暑で赤倉籠もりかなと思っていたうちに秋になってしまいました。その頃財団にお電話をしたのですが、「ただ今入院中、でも大したことはない」とのことでしたので、これまた夏バテのご静養だろうぐらいに勝手に思い込みあまり気にしませんでした。

しかし、九月も終わり近くなると私の胸中が何かしら気ぜわしくなり、お目にかからねばーお見舞の手紙を書かなければと思うようになってきました。そこですぐにお見舞状を書けばよかったのですが、雑用に追われのびのびにしていまいやと書いたのが十月十三日だったと記憶しています。今にして思えばせっかく虫が知らせてくれたのにと残念で仕方ありません。

やっと投函してほっとしたのも束の間、十七日の朝刊を見ることになったのです。

「な、なんてことだ!!」

愕然として目をこすりながら何回も何回も記事を追いました。

このようなお読みいただけたかどうかかわからない手紙のことを思い出しながら、せめてご生前ぎりぎりにお手紙を書いたことを反省をしながらも慰めをしています。

美しい踊りを想いつつ

(社)日本照明家協会副会長

舞台照明家 吉井 澄雄

黛節子先生に初めてお目にかかせて頂いたのは、いつ、どこでだったろうか。

今、もはや頼りなくなりかけている、私の記憶の底を探ってみても定かではない。

黛先生が未だ藤間姓を名乗られていて、私が舞台裏の世界に足を踏入れ始めて間もなくの、少年の頃だったことは確かだろう。

だが、その少年の頃、最初に触れた黛先生の舞台の印象は、今も私の目の底に、鮮明に残っている。

藤間節子リサイタルというタイトルでの公演だったろうか、おそらく先輩スタッフのお手伝いだったと思う、戦火を免れた昔の帝国劇場の舞台だった。劇場正面玄関の階段が皇居のお濠に向っていて、楽屋口は第一生命の建物との間の道に面していた。客席も舞台も今の帝劇より、ひとまわり小さく、インティメイトで素敵な劇場だった。

その頃の私は、歌舞伎や日本舞踊といった伝統芸能には、なぜかはわからないが、ある種の異和感に近い感じを持っていた。

舞台の仕事をしようとしている一人として、祖先の血を受継ぐ伝統芸能は、勉強すべき対象ではあっても、若者の感覚に、そのままフィットする芸術とは言えなかった。

しかし、黛節子先生の舞台には、当時の私たちの心を捕えた、セルジュ・リファールやアントニー・チュウダーと同質の感動と美しさがあり、いわゆる邦舞の舞台とは一線を画していた。

先生と個々の作品について、親しく話をかわさせて頂くようになったのは、赤坂のスタジオでの公演になってからのように記憶しているけれども、小さい空間であるだけに、先生の、伝統芸能を突き抜けた、独特の美意識によって創られた作品群、踊りや振付ばかりでなく、衣裳や小道具、履物にいたるまで、綿密に目配りされた美的感覚に、多くを教えられ、また尊敬と共感を持って仕事をさせて頂いた。

もはや、かなわぬ望みと知りつつ、我が国の伝統的な、民俗的な踊りを、先生の目で創りなおし、リファインして、世界の舞台へ紹介しつづけて頂きたかった。

先生の衣鉢を継ぐ方々に、先生の残された作品群の継承と共に、先生の遺志を汲む踊りを創りつづけられるよう希みたい。

黛節子先生とその作品を想いつつ、心からの御冥福をお祈りしている。

節子さんに

吉田 玲子

貴女とはもっともっと話す時間がほしかった。話せば、私のものを見る眼がもっと明るく、楽しく、生き生きと輝いて見えるようになったであろうと思います。貴方に接する機会があまりにも短かった事が残念でなりません。

貴女のお宅に伺ったのは、ほんの数年前でした。きっかけは、貴女と幼い頃から仲良しだった私の叔父と、貴女が仲違いをして、互いに心の底では仲直りしたいのがみえみえなのに、相方とも意地を張り合っているのをみて、レスリーさん達の力をかりて、二人を仲直りさせようとの下心があつてのことでした。

不思議でした。幼い頃から、顔は知っていても話す機会はなかった貴女と私なのに、何を話してもすぐ理解し合えましたね。下心等はそっちのけで、たわいのない話題を短い言葉でやりとりしては、二人で笑いころげました。共通の感じ方だったのです。

貴女は、これと言って舞踊の事は話さなかったけれど、貴女は民族舞踊の化神でした。貴女との会話から、貴女が舞踊から得ているエネルギーを感じました。そのエネルギーは私のエネルギーにもなったのです。

秋の初めにお伺いした時、帰りぎわ、お庭のすすきをお土産にと手折って下さいました。家に帰って生けてみて、私ははじめて「すすき」の楚々として凛とした美しさを知りました。忙しさにかまけて身辺にある美しさを見逃している私に、貴女は教えて下さったのです。そのお庭の桜は、貴女が大切にしていらっしゃるお母様のご命日に、毎年咲くのだと話して下さいましたね。そう、一緒に旅行にいかうとも、楽しい期待をもって話して居りましたのに、あまりにも早く、貴女は私の言葉の届かない所に行ってしまった。

でも貴女は今、お母様の前で舞い、お母様は貴女の舞いをしっかりと御覧になり、ともに楽しんで居られることと存じます。そして貴女は私の心の中で生き続けるでしょう。

そして、何日の日かの再会を約します。

1996年盛夏

情熱の人、黛 節子さん

演劇評論家 依光 孝明

若い情熱に燃えた黛さんは、相手を取りこにしてしまう魅力に満ちていた。

朝日新聞の名物記者で女性をみる目が確かな秋山安三郎さんに、「素晴らしい人だ」と歌舞伎座かどこかのロビーで紹介された私も、少し年上の美女に一目で魅せられた。藤間節子として「智恵子抄」で芸術祭奨励賞をとり、黛の姓を名乗りはじめたところで、その後、お会いする度に六代目菊五郎の芸について話が弾んだ。「鏡獅子」や「道成寺」を初日から千秋楽まで、毎日のように夢中で見続けたという黛さん。六代目崇拜の私。お互いに目を輝かせながら、2時間、3時間があつという間に過ぎていた。

巻紙に緑色で書かれた水茎の跡うるわしい手紙を、「ラブレター」と仲間に見せて、うらやましがられた思い出もある。

日本の農耕民族の祈りや喜びや悲しみを追求して、意欲的に創作活動したのはご存じの通り。中国で少数民族の舞踊を取材し、中国の踊り手を招いて、日中友好の絆を深めたのは黛さんならではの仕事であった。

踊りの好きな人で、「私の踊りは日本舞踊でなく、日本の踊り」と、いつも言っていた笑顔が懐かしく浮かんでくる。



智恵子抄 千鳥啼く、

黛 節子

写真撮影 清水三郎



深 川

黛 節子

写真撮影 清水三郎

永遠の思い出

雲南省舞踏家協会

常務副主席 劉 金 吾

黛節子先生が私達のもとを去られてから丁度一年経ちました。この一年間先生のお声と笑顔がいつも頭に浮かび、両国の民族舞踊交流を引き続き進めてゆきましようとの声が耳元に響いておりました。

黛節子先生、貴方は今なお我々の間に生き続けております。ジノ族の山里、チワン族の村、シーサンパンナや紅河沿岸などの村人達はどのようにして貴方のことを忘れることができませんか。先生が彼等と一緒に踊っている姿や、タイ族の岩宰君がただ象脚鼓を叩くために日本へ渡り貴方の踊りの伴奏をしたことが今も眼に浮かびます。迪慶高原のチベット族の娘、怒江峡谷のヌー族の若者、玉龍雪山麓の東巴、紅河沿岸の煙盒舞の踊り手等々。訪日して先生から親切におもてなしを受けた全ての者、雲南へやって来られた先生をお世話した全ての者、先生にお目にかかった者もかからなかった者も、全ての雲南省の舞踊関係者は時折先生のことを想い出しております。民族舞踊に終生を献げ、中日両国の民族舞踊交流に心血をそそぎ、たゆまず努力を重ねて来られた先生の精神は、永遠に我々を鼓舞し続けております。



日本中国文化交流協会のお席で

劉常務副主席・杉村春子氏・故 黛 節子

黛節子先生、本を出版して中日両国の民族舞踊交流のことを伝え残して行きたいとの先生の遺言は、私達が必ず実現するよう努力いたします。中日民族舞踊交流をさらに深めてゆきたいとの先生の願いは積極的に進められております。先生が精魂をこめて水をやり育てこられた民族舞踊芸術の花はより鮮やかに咲きはこることでしょう。先生が自ら植え育てて来た友情の樹はさらに根を張り葉を繁らせていつまでも青々と繁ってゆくことでしょう。中日両国の民族舞踊の虹の架け橋は益々広がってゆき、はてしない天空へと通じて行くことでしょう。

黛先生、貴方は天国で微笑んでおられることでしょう。

黛先生、安らかにお眠りください。

1996年8月28日、昆明にて

黛 節子先生の思い出と看護日誌

黛 莉香

黛先生の門を叩いてから先生にお別れする日まで本当に至らぬ事ばかり先生を毎日悩ましておりました。

一つ一つご指導下さった先生。一番足手まといになった私が、最後まで先生のお側にいられた事は、本当に幸せな事でした。偉大な民族舞踊家黛節子先生の、在りし日の楽しい思い出のみが心に浮かんでまいります。

1967年に黛ビルを建設され、その4Fに黛アートサロンを設立され、御自分の考えられた事を、次から次へと試みられていらっしゃった先生。厳しい方でしたので、一つの作品に取り組まれると何べんでも現地に赴き納得いくまで解明なされ、深く深く掘り下げ発表なさっていらした。その“黛アートサロンの夕べ”も第1回を1968年に始められ、外国の大使、公使をお招きしたりしながら第40回まで続けられました。

日本人があまり行かれなかった頃、サウジアラビアのジャパンデーの出演、パリ公演、イタリア公演、アメリカ・ノックスビル市の国際エネルギー博への出演、国内では日生劇場（1975・1976）、国立劇場、東京文化会館での公演。また草月ホールでの日中舞踊交流公演も10年目を迎えました。特に1994年紅河、文山等、中国の少数民族の奥地まで取材に行かれたときは、1986年に東京に招聘した中国の方々が要職につかれていて、各地で何万人とも知れぬ大会場で大歓迎をうけられました。黛先生は貴賓席で中国の要人方と席をならべられ日中の舞踊交流について、深く話し合いをされました。黛先生の名は中国少数民族に強い印象を与えました。

又1986年3月25日、当時文化庁次長であられた加戸先生から、それまで長い間考えつづけていらっしやった財団設立の許可のお知らせを頂いたとき、手を取り合って泣いたその喜び様は今でも忘れられません。いつまでも財団設立の恩人として加戸先生に感謝のきもちを持ち続けられていらっしやいました。

又一つの研究のために、日夜考えられて芸術の心の悩みに達すると、昔は高村光太郎先生、志賀直哉先生方に教えを受けられて、御自分の迷いを解明できたのに、今はと悩んでいらっしやいましたが或る日、現トルコ共和国駐箚特命全権大使になられた遠山敦子先生が、文化庁次長でいらっしやった時、最初お目にかかれた日は、お母様にお目にかかれた様だと、大変お喜びでした。お忙しい遠山先生ですが、進むべき道に迷いがあつたら、何時でもお目にかからせて頂けるお約束が出来たと大変喜んでおられました。

先生は今日まで民族舞踊芸術の為の毎日でした。私共がボケーとテレビで見逃すようなことでも先生の観察力は違いました。どうして、あの人はあの様な踊り方をするのかしら、と言ってそれを細かく分析探求なさいました。

秋晴れの休日、私は病床の先生に、先生早く元気になってくださいと拝む気持ちで何遍も手を取り合って過ごしました。

お目をぱっちりあけて何かうなづいていらっしやる先生。神様どうしてこの偉大な先生をこんな病気にしたのです、早く、早く、治して上げてくださいと必死に祈りました。神は先生を奪い取ってしまいました。でも先生の心は何時までも私達に教えを授けて下さる事でしょう。御気分の良い日は朝食をすませ病院の決った行事点滴等が終わると、必ず踊りの心、踊りの事、中国の踊りの交流の事、先生御自身の体の訓練、そのうち太鼓を叩いたり、唄を唄ったり、看護婦さんに見せたりして楽しんでいらしたのですが、踊りの神髄をわかる舞踊家になるという信念を全うなさった先生でした。でもまだまだと坂を登り詰めていらっしやる途上でしたのに。

7月15日 午前中 荻窪出発

12時半 病院到着 点滴 入院 505号室

昼食から病院食おいしく召し上がる。

荻窪で私に栄養失調にされたので痩せてしまったと先生に叱られる。今日から何と言ってもカロリーのある食事を召し上げられるので一安心、小早川先生はお休みだけど、顔を見せてくださって点滴をしてやっと落ち着かれた。

7月16日 毎日点滴、午前中体の清潔、肌着一切取換え、小早川先生の回診があり、その後テレビを御覧になる。召し上がりたいものを、あちこちから用意しておいしく召し上がる。お盆の送り火を焚きに荻窪に行く。棘抜き地藏に先生の平癒の祈願に行く。

7月25日 主治医の小早川先生に大野先生が呼ばれ、黛先生の細かい病状のお話しがあったご様子。でも私達にあまりお話しにならない。少し心配。浅香さん見舞にみえる。

8月16日 朝御機嫌が悪い。お早う御座いますと申し上げることで、気分のよしあしが感じられる。10時点滴、湿布取換え、果物の用意、髪をとかし、足のマッサージ、一日の仕事始まる。午後レントゲン、入院して1ヶ月、元気で療養生活が過ぎる。「1ヶ月勿体ない事をしてしまった、今日から入院すればよかった」とカレンダーを見て残念そうに言われた。

8月26日 起きて召し上がっていた食事寝たまま取られる。食べさせて差し上げる。ジャムを沢山つけすぎて甘すぎると叱られる。伊地知さん御見舞にみえられる。

毎日通っていた病室のトイレで、突然「私どうしたのかしら歩けない」と訴えられ、「先生そんな事ないです、今までリカと手を取り合って話しながら来ましたが」と申し上げるとゆっくりとゆっくり休んで「よいしょ1、2、3」で歩き始めやっとベットに戻られた。この時先生の亡きお母様も目が御不自由でしたので歩かれた時はお供をすると、特に階段は1、2、3と数えながら歩いたときの事が頭によぎり胸が痛んだ。

それから一週間の間はベットから起き上がってトイレに行く準備をなさっても又ベットに横になってトイレに行かないとおっしゃる日が続き、どんなにか大儀だったのだろう。

8月28日 毎日大野先生のおいでを待たれていた黛先生だった。気持の良い朝。今日は財団の打ち合せの日でした。打合わせが始まり、黛先生がゆっくり静養なされる様に大野先生を常務理事に任命し、理事長代行と云う形式に決まった。「仕事一生懸命やってね」と喜んで安心なさったごようす。

8月29日 御気分よい一日。大野先生を財団の常務理事にさせていただくよう財団の諸先生方宛のお願い文に、黛先生がサインをされる。出来上がって、ああ疲れたと一休みされる。夕食おいしく召し上げられる。稲田様お見舞いにみえる。

8月31日 胸が痛いと言われ、ずっとシップ薬を貼って差し上げていた。始めは左側だったが今度は右胸も痛いとおっしゃるので痛み止めの薬を塗って腋の下から乳首にかけて塗りシップを貼る。痛い痛いのは可哀想で堪らない。鎮痛剤の坐薬はいやだと云われる、どうしよう。

- 9月1日 38. 8度熱高く水枕、遠山文化庁長官御見舞いの花と厄除けいただき、どうしてもお目をおあきにならない。諦めて帰られる。目を覚まされてその事をお話すると、「お目にかかれなくて残念だった、申訳なかった」と繰り返され涙を浮かべて喜ばれる。「早く元気になって、お食事を御一諸したいとお電話をかけて置く様に」と云われる。
- 9月2日 胸が痛い、起き上がるのが苦痛、咳が出る、小早川先生より簡単な処置をしましょうと云われた。余りたいした手術と思わないのにどうしてこんなに痛まれるのか「先生がんばりましょう！」と云う。
この頃はベットから直線距離にして2メートルもない手洗いに行くまで2分はかかる。岩山に登る様だ。オムツなんて本当に気持ちが悪いだろう、どうしてこんな目に遭うのか可哀想。
- 9月3日 坐薬使用で排便、酸素外し、足、腹の痛みを訴えたので体位変更。
- 9月4日 シャーベットを召し上がる。酸素使用幻覚症状が少しある。
小松先生より、黛先生の意志能力があるかないか小早川先生に調べて貰う様連絡あり。私達にははっきり黛先生はおっしゃるが、看護婦さんには返事もなさらない、きっと大儀なのだろう。
- 9月9日 利尿剤、尿が少ない、導尿管が詰っていたので取換え、気持ち良く眠られる。
武田会長、レスリーさん、吉田さん、伊地知さん見舞いにみえる。
- 9月10日 睡眠中にウォー、ウォーと音声を発する。10時目を覚まし、腰、足をさする、3時、林一枝先生、上田評議員、折角御見舞いにお見えになったが目を覚まされず残念ながら御帰りになる。
- 9月11日 口内炎の薬つけ、眠り続ける。黛先生の御希望で大野先生が常務理事になられるための書類を作成して、安田理事、中田理事、鹿海評議員、上田評議員、小松先生、栗林先生他に財団事務の連絡をする。
- 9月12日 石上神宮森宮司にお願いする、祈る様な気持ちで一口、一口、お口に運ぶ、中々召し上がらない。ゴクンと飲み込まれるのを確めて嬉しくなる。一日終わる。
- 9月13日 午後5時30分頃から容態急変。心臓停止、人工呼吸して復帰、人工呼吸器つける。大野先生莉香病院に泊る。伊地知さん、智英さん、遠藤さん、皆さん御見舞いにこられる。今日は中々召し上がらない、10時坐薬、浣腸で処置し少し気持ち良さそうになられる。ほとんど休んでいる。シャーベットとお薬召し上がる。日一日と衰えて行く。先生を神様助けて下さいと祈る。森宮司様のお顔が浮かぶ。小早川先生帰られる。5時、ナースが来て吸引体位変更して帰る。
- 9月14日 鼻孔呼吸の変更。先生安定して来たので安心して今日全員帰られる、私はビル泊。
- 9月20日 点滴の中に痛み止めは入れていないと云うが、薬の故か、変な風になって心配。おっしゃることがすべてまともではない。大きな綺麗な瞳をぱっちり明けられる。何かを訴えるその目は異常で怖い。意識混濁が進む、何か幻想が現われているよう。痛みをコントロールする事は出来ないのだろうか。徐々に意識が霞んで行く様で心配。
- 9月21日 肋膜水取り。
- 9月22日 熱が毎日ある。血圧が下がってびっくりする。正常に戻る。
- 9月23日 熱、平熱に戻り、目を開け一日中安定、血圧180で安定。
- 9月24日 平熱、気持ちが良いと云われ足をさすると、うとうと休まれる。「私どうなる、何か変だ、変だ」と繰り返される。
- 9月27日 3時30分診間由佳さん家裁より来て確認、小早川先生、三上主任立ち会う。矢永さん、三山さん、御見舞いに見える。
- 10月1日 顔色悪し、異状なし、酸素の度数を下げたいと云う。
- 10月2日 一日中眠っていられる。やっと大便出る。気持ち良さそう。
- 10月4日 伊地知さんも心配して毎日御見舞いにみえると先生喜ばれる。洪さんも御見舞いに見える。
- 10月5日 紙かしてと云われ、何か先生の思うことをスケッチなさる。これ、判断しなさい、と云われる。字が書けなくなるとおっしゃる。体についているチューブを引きちぎりたい様な仕草をする。
- 10月6日 小早川先生に書類渡す、虚空の定まらない視線で見詰め、手は何度も空に向かって延ばされる。何か捕まえようとしているらしい。声は出ない。
- 10月7日 朝、機械が抜けて、取替える。人工呼吸モーター凄いい音がする。

- 10月8日 人工呼吸が異常のため、回診の先生に診て貰う。顔色良くない。うつろな目で虚空の幻覚を追いかけて、それを掴みとろうとする様。両手を高く。しかし力なくおどるように空にひらひらとさせている。
- 10月9日 後で聞いたことだが、あの両手を上げる動作は「苦しい、苦しい」と、呼んでいる動きなのだろう。呼吸したくても酸素がちっとも入ってこないで息が苦しいと云っているのだとのこと。私達が幻覚を見ていらしゃると思った動作は実はあえいでいらしゃったのだろうか。
- 10月10日 尿が少ない、虚空を見つめていらしゃる。両手を差し延べて手を取り髪を綺麗に梳かす。利尿剤、気持ち良さそうに休まれる。
- 10月11日 少し落ち着いて色々なことを話される、癌になるのも運命か。少量の経口抗ガン剤が投与されているもようでも、効果は全く望めない。いずれにしても完治の道は断たれている。とすれば、残された時間をどのようにしたら良いのだろうか。
- 10月13日 呼吸コントロールの注射をする。少し落ち着いた様子、小水少ない。
- 10月14日 レントゲン撮る、血圧下がる、小水少ない、血圧の薬入れる。
- 10月15日 血圧80、小水出ない。
- 10月16日 体温36.5度、血圧下がる、熱も下がって、少し持ち直す。急変、11時03分呼吸止まる、眠るような安らかな旅立ち（御臨終）さようなら、先生御免なさいと泣く。
さようなら。さようなら。

財団法人

黛民族舞踊文化財団のあらまし

財団法人黛民族舞踊文化財団は、わが国伝統の民族舞踊を舞台芸術として確立し、その普及向上を図るとともに国際文化交流を行うことを目的として、昭和六十一年三月文部大臣から設立を許可された団体です。

財団設立後は、(1)民族舞踊普及向上のための中央における公演をはじめ、地方巡回公演を活発に行ってひろく一般にこれを紹介し、また研究成果の発表会等を開催し、(2)後継者の育成を目的として民族舞踊の研究者（音楽、振付けを含む）、舞踊家のための研究会、研修会等を開催して創作活動を奨励すると共に技能の向上を図り、(3)日本各地および東南アジア諸国の民族芸能を取材し、その研究を行うと同時に収集した資料を整理保存して一般にこれを提供し（将来は資料館を設置して一般の利用に供することを計画しています）、また、(4)世界各国にはそれぞれ民族舞踊団が国家の庇護のもとに活動していますが、これらの舞踊団との交流や、東南アジア諸国の民族芸能伝承者たちとの交流等、幅ひろい国際交流を推進して相互の連携と研鑽につとめ、(5)民族舞踊、民俗芸能に関する資料および研究成果等の出版物を刊行して、民族舞踊に対する理解を深める目的達成のため、年次を追って事業を充実していきたいと考えております。

しかしながら、事業を発展充実させていくためには、何と申しましても経済的基盤を確立する必要があることを痛感いたしております。

当財団が、真にわが国を代表する民族舞踊の振興団体として育ってまいりますよう、財団の事業目的をご理解くださり、各界の方々の御支援を心からお願い申し上げる次第です。

つきましては、当財団には下記の通り賛助会員規程を設けておりますので、皆様にはぜひ賛助会員として、会費により御支援を賜りたく、お願い申し上げる次第です。

民族舞踊文化 No.9

1996年10月16日発行 発行人 犬丸 直 編集人 大野 晃

〒107 東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F

Tel 03-3583-3633(代)
Fax 03-3583-3639

財団法人 黛民族舞踊文化財団

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE

MAYUZUMI BLD. 4F, 3-10-3, AKASAKA, MINATO-KU, TOKYO